法政大学

EToS

江戸東京研究センター

Hosei University Research Center for

Edo-Tokyo Studies

2025 vol.9

⑨

法政大学
HOSEI University

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
2-17-1 Fujimi Chiyoda-ku Tokyo, JAPAN

表紙図版の出典（上から）：
■「天保江戸大地図（1843年）」国立国会図書館
■「国土地理院航空写真（2017年）」国土地理院
■（一財）日本地図センター刊行「参謀本部陸軍部測量局　五千分一東京測量原図」のうち「新宿区市ヶ谷付近」を使用
■「ソリッド・ボイド・マップ（2018年）」法政大学北山研究室製作

法政大学
江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

法政大学 江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies
https://edotokyo.hosei.ac.jp
問い合わせ先：法政大学 江戸東京研究センター事務室
E-mail edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp　TEL 03-3264-9682

発行：2026 年 3 月 31 日

目次

マニフェスト 2

都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価 3
江戸東京研究センター長、法政大学文学部教授　米家志乃布

研究プロジェクト活動報告

① 地理情報システムと名所の景観 4

② 都市表象史 6

③ 表象文化と近未来デザイン 8

④ 地図プロジェクト 10

⑤ 外濠市民塾 12

⑥ 江戸東京の島プロジェクト 14

⑦ 「Tokyo Time Travel」東京街歩きツアー事業 16

2025年度事業報告

シンポジウム・研究会

シンポジウム「東京を散歩哲学する」 18
講演会「江戸空間のなかの蔦屋重三郎」 19
研究会「島嶼プロジェクト研究会」 21
シンポジウム「江戸東京の大名庭園をめぐって ―つくられ、描かれ、受け継がれる空間―」 22
江戸東京研究センター2025年度報告会 25

学内外・地域活動

講義「フィールドワーク」 26
講義「都市解読方法特論―東京発掘プロジェクト 水辺編」 27
EToS監修・協力講座「新・江戸東京研究」江戸文化編・建築都市編 28

著書・論文・その他 29

メンバー 38

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature, history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally and spatially, and derives from them a method and theory for constructing sustainable global communities. It is a learning research base where that wisdom is nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of global communities.

都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価

江戸東京研究センター長、法政大学文学部地理学科教授

米家志乃布

本センターは、2017年度に文部科学省・私立大学研究ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」に採択されたことにより設置されました。当初の研究期間である5年を経過し、現在まで大学より延長が認められてきました。新しい段階として、当センター独自の新たな江戸東京研究の可能性を継続して調査・研究し、単なる歴史だけでなく、これからの東京、そして日本の価値観の転換と行く先とを考える視点を見出すことを目標としています。とりわけ、法政大学が総合大学であることの利点を生かし、理系と文系が協働して研究を進める当センターの特徴と意義をより前面に押し出すような枠組みを設定いたしております。

具体的には、「地理情報システムと名所の景観」「江戸東京の文学と都市史（2024年度より都市表象史）」、「表象文化と近未来デザイン」の3つのプロジェクトをメインとし、2025年度からはメインプロジェクト横断型の「地図プロジェクト」を立ち上げました。市ヶ谷校地に理系のデザイン工学部が存在していることを活かして、個々のプロジェクトに当該学部からリーダーを選出し、文系のリーダーとの共同関係をスムーズに築けるようにしたうえで研究活動を行っております。

2024年度には、本センターの研究プロジェクトが三菱財団の人文科学大型連携研究助成（研究代表者：米家志乃布）に採択されました。申請テーマは「都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価ー江戸東京研究を事例として」です。この研究助成をもとに、各プロジェクトや全体での研究会やシンポジウム企画を重ね、研究成果を公表し、研究終了の2027年度までにEToS叢書の続編の刊行および全体成果としての江戸東京の地図作成・刊行を目標としました。現在、すでに、いくつかのシンポジウムの成果をもとに、報告書や学術書・市販の一般書の制作が進んでおります。

2024年度からは公益財団法人・東京観光財団と協定を結び、東京を訪れる外国人観光客向けの「Tokyo Time Travel」街歩きツアー事業を展開いたしました。旅行者に広く東京のストーリーを伝えること、ウォーカブルシティ東京の魅力を知ってもらうことを目的としております。また2023年度から始まったNHK文化センター青山教室の「新・江戸東京研究」講座は、2025年度は「江戸文化編」「都市建築編」の6回ずつの講座とし、今年度も合計で12名の講師を派遣いたしました。江戸東京研究センターの研究員によるさまざまな研究成果を、社会に還元し、アピールする事業としても位置付けられるでしょう。

引き続き、「文理複眼」を枠組みとした江戸東京研究センターの特色を生かした研究活動を推進し、本センターの学術的な存在意義を社会にアピールしていきたいと考えます。どうかよろしくお願い申し上げます。

米家志乃布

法政大学文学部教授。

1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士（人文科学）。法政大学第一教養部専任講師、助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。単著『近世蝦夷地の地域情報ー日本北方地図史再考』法政大学出版局2021年、編著『アートの地理学ービジュアル・アートとパブリック・アート』古今書院、2025年、分担執筆に「名所と視覚的経験ー江戸東京の風景」（江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年）など。

1

Project 1

地理情報システムと名所の景観

法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授、プロジェクトリーダー　福井恒明
法政大学文学部地理学科教授、プロジェクトリーダー　米家志乃布

本プロジェクトは、地理情報システム（GIS）を用い、江戸東京の様々な名所を2次元・3次元に表現する方法を探究し、それを具体的な形で公開することを目標としている。2025年度は、江戸東京の史跡に関するシンポジウムの成果を出版する作業を中心に行った。また、昨年度までに実施してきた名所に関する地理分布研究のデータ整備を継続した。

（1）『史跡からみる江戸東京』の出版
2024年10月19日に開催したシンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」の内容を取りまとめ、「江戸東京を考える」シリーズ1『史跡からみる江戸東京』として出版した。
シンポジウムにおける研究報告のうち、「東京の史跡／史蹟と地域性（米家志乃布氏）」、「河井弥八と文化財保護行政（内藤一成氏）」、「井下清と東京市公園行政の史蹟保存施策（齋藤智史氏）」、「江戸城外濠の利活用（高道昌志氏）」、「江戸史蹟の保存とその課題ー浜離宮恩賜庭園を素材としてー（根崎光男氏）」の内容を原稿化していただいた。さらに陣内秀信氏に「関東大震災と東京の復興―建築・景観・思想・コミュニティ」と題した論考をご寄稿いただいた。
シンポジウムでは、明治から昭和初期にかけての東京市の取り組み、戦後の皇居の史跡指定、大正から現代に至る江戸城外濠の変遷、江戸から現在まで大きく位置づけが変わってきた浜離宮が題材となった。全体を地図上で俯瞰しながら、明治以降の東京の破壊と建設に沿った長期的な時間スケールでの議論が行われた。シンポジウムにおける集中的な議論の中で、それぞれの報告が相互に関連づけられ、東京の都市空間の成り立ちを理解するのに史跡という切り口が有効であることが共有された。この議論の構造を書籍でも再現するために、序章で各章が対象とする内容の時期と要点を図化して示し、書籍全体の見取り図を示した。さらに終章で改めて東京における史跡の意義を確認する構成とした。これにより、史跡を通した東京の都市空間を理解する枠組みを体系的に提示することができた。

（2）史跡研究データの整備
昨年度に引き続き、明治から戦後にかけての東京の史跡や名所案内について、各資料で紹介された各所の位置を地図上にプロットし、分布の変遷を把握できるようなデータの整備を行っている。
『東京史蹟寫眞帖』『東京府史蹟』『東京の史蹟』『東京都史蹟名勝天然紀念物旧市域内』については、前節で紹介した書籍に一部の成果を盛り込んだ。さらに詳細な地図分析のデータ化を進め、地図としてビジュアルに示すための準備を進めている。また、『大東京写真案内』（1933）や『東京案内』（1950）などの案内本や名所絵の地理分布についても地図化と分析を進めている。

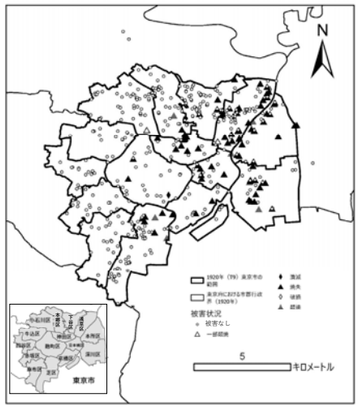


図　関東大震災による史蹟の被害状況
『東京の史蹟』（1925）より作成

（3）「江戸名所」「東京名所」に関する出版企画の再検討
これまで『名所江戸百景』の描写領域の推定結果による江戸の風景体験に関する成果、および近代東京の案内本である『新撰東京名所図会』、『大東京案内』の名所分布に関する成果の出版企画を進めてきた。この間、追加的なデータや知見が蓄積されてきたことから、改めて内容を整理・充実を図りつつ書籍の構成を見直す作業を行っている。

本プロジェクトはデザイン工学部、大学院デザイン工学研究科、文学部および大学院人文科学研究科の学部生・大学院生が作業の中心的役割を果たしている。協力してくれた学生諸君に感謝の意を表する。

写真1　外桜田門（『東京府史蹟』）

写真2　国府址（『東京府史蹟』）

写真3　平富町津波警告碑（震災直後）（『東京の史蹟』）

福井恒明（ふくい　つねあき）
法政大学デザイン工学部教授
1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。博士（工学）。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『土木デザイン』、『景観用語事典』等。千代田区景観アドバイザー、最上川左沢・四万十・葛飾柴又・佐渡の文化的景観に関わる。

米家志乃布（こめいえ　しのぶ）
法政大学文学部教授。
1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士（人文科学）。法政大学第一教養部専任講師，助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。著書に『近世蝦夷地の地域情報ー日本北方地図史再考』法政大学出版局2021年。分担執筆に「名所と視覚的経験ー江戸東京の風景」（江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年）。

②

Project 2

都市表象史

法政大学文学部日本文学科教授、プロジェクトリーダー　小林ふみ子
法政大学デザイン工学部建築学科教授、プロジェクトリーダー　高村雅彦

「都市表象史」プロジェクトは、当センターにおける研究の歴史的部分を担当しています。先史時代以来の歴史のなかでもとりわけ近世・近代の人文的な文化の基層を明らかにし、その上で地域のコンテクストや仕組みがいかに形成されてきたのかを、文字テキストや図像が表象する名所空間などを文理双方の視点から複眼的分析することによって、その特質を探ることをめざすものです。

本年度は、国内外の他の都市と較べたとき江戸東京の唯一無二の特徴といえる大名屋敷由来の庭園に注目したシンポジウム「江戸東京の大名庭園をめぐって　一つくられ、描かれ、受け継がれる空間一」を実施しました（2026年1月10日）。高村研究室出身の本センター研究員、内藤啓太（東京農業大学）・畠山望美（本学デザイン工学部）の大名庭園の構造をめぐる研究を核として、歴史学・美術史・文学から、それらがどのように作られ、描かれ、享受されてきたか、その歴史をたどるとともに、今日どのように異化され、未来に向けてどのような可能性があるかを考える企画となりました。
岩淵令治（学習院女子大学）「松平定信と江戸屋敷の庭」、内藤「水源からみた江戸の大名庭園　一上水によってつくられた景に注目して一」、野田麻美（神戸大学）「理想化と写実の狭間を蠢く庭園表象　一狩野養信を中心とする江戸後期庭園画について」、真島望（熊本県立大学）「近世名所としての大名庭園」、畠山「大使館に受け継がれた江戸東京の大名庭園　一イタリア大使館を中心に一」、竹内智子（千葉大学）「大名庭園と都市一自然を活かした多機能な都市空間一」の6本の報告がなされ、それらに対して自然観や精神性において共通性をもつ中国庭園との比較の視点からの高村雅彦コメント、世界の都市と庭園と比較したなかでの特徴を論じた陣内秀信コメント、江戸文化における庭園の意義を述べた田中優子コメントの3つで締めくくられました。詳細は開催報告に譲りますが、大名庭園の成り立ちから今日まで、まさに多角的な視点から捉えることができました。
大名庭園そのものは、各藩の国元の屋敷でも作られたものですが、参勤交代という特異な制度のために江戸に約300もの藩の屋敷が置かれ、それぞれに大なり小なりの庭園がしつらえられることで、江戸に集中するようになったこと、そのうち近代以降、所有者が変わっても庭園として存続ないし復興されて今に至っているものが少なからず存在することは、まさに江戸東京ならではの歴史的遺産です。それだけでなく、それを作らせた大名たち、またそれを支え、守ってきた人びとが、庭を造り、水を引き、各地から取り寄せた岩石によって自然のすがたをかたどり、四季の樹木や草花を配してめでることを重視していたという事実も重要でしょう。さらにときにはそこに各地の名所や古典詩歌にちなんだしかけを施してその由緒を想像させるような意味をもたせたことも含め、人間が住まう都市の理想とはなにかを考える多くのヒントが得られました。この成果は、来年度中に書籍化すべく準備を進めています。

その他、昨年、小林の科学研究費補助金（基盤研究（C））により江戸東京研究センターの後援事業として実施した国際シンポジウム「摺物にみる江戸狂歌人の知識と教養」も、まもなく書籍として刊行予定です。江戸を拠点とする狂歌人たちのグループが製作した狂歌摺物や狂歌本の基底にある知識や教養のあり方を探る論集で、江戸という都市に対する認識の点で江戸東京研究とのつながりも見いだせます。
次年度の計画は未定ですが、引き続き未来の都市へのヒントを歴史のなかに探っていきたいと考えています。

『浴恩園図記』谷文晁原図、朝岡旦嶠写　明治18［1885］年　国立国会図書館デジタルコレクション

小林ふみ子（こばやし　ふみこ）

1973年山梨県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。2004年法政大学着任、2014年より文学部教授。専門は日本近世文学・文化。2004年第29回日本古典文学会賞、2024年第17回国際浮世絵学会賞を受賞。主著に『天明狂歌研究』（汲古書院、2009年）、『大田南畝江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店、2014年、2024年角川ソフィア文庫として再刊）、『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル、2019年）などがある。

高村雅彦（たかむら　まさひこ）

1964年北海道生まれ。法政大学大学院博士課程修了。2008年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。専門はアジア都市史・建築史。1999年前田工学賞、2000年建築史学会賞を受賞。2013年上海同済大学客員教授。主な編著書に『建築史への挑戦』（鹿島出版会、2019年）、『水都学Ⅰ～Ⅴ』（法政大学出版局、2013年～2016年）、『タイの水辺都市一天使の都を中心に一』（法政大学出版局、2011年）、『中国江南の都市とくらし　水のまちの環境形成』（山川出版社、2000年）がある。

③

Project 3

表象文化と近未来デザイン

近現代の武蔵野のレイヤーを探査する

法政大学国際文化学部教授、プロジェクトリーダー　**岡村民夫**
法政大学デザイン工学部建築学科准教授、プロジェクトリーダー　**山道拓人**

2024年秋に江戸東京研究センターが三菱財団人文科学助成を獲得したことを受けて、本プロジェクトでは東京西郊（とりわけ世田谷区）を集中的に研究するという当面の方針を定めた。その最初のイベントとして岡村はシンポジウム「東京を散歩哲学する」をコーディネイトし、2025年3月1日に開催したが、2024年度の報告書ではその結果を書けなかったので、ここで報告しておきたい。プログラムは以下の通りだった。

- 島田雅彦（法政大学国際文化学部教授、小説家）：チャランポランへの誘い
- 伊東弘樹（早稲田大学教育学研究科後期課程）：「境界」を問う散歩ー国木田独歩の「武蔵野」
- 岡村民夫（法政大学国際文化学部教授）：散歩哲学の先駆者　ニーチェ、柳田国男、萩原朔太郎
- コメンテーター　山崎修平（詩人、文芸評論家）
- コメンテーター　陣内秀信（法政大学名誉教授）

これまで本研究センターのシンポジウムや研究会において東京のさまざまな地域が取り上げられてきたが、東京を歩く行為自体に焦点を当てたシンポジウムはこれが初めてだったはずだ。島田氏は、小説執筆と密接な関係にある自身の散歩（東京の居酒屋巡り、多摩川沿い、ヴェネツィア）の流儀を披露しながら、モンテーニュ、ルソーなどの西洋の思想家から萩原朔太郎、古井由吉などの日本の作家の散歩の流儀を論じた。伊東は、小説「武蔵野」に表現された国木田独歩の散歩を江戸後期から明治前期の渋谷の変遷から捉えなおした。岡村は、成城移住以降の柳田国男の武蔵野散歩と、下北沢・代田移住後の萩原朔太郎の東京西部の新開地散歩を、ボードレール／ベンヤミンの「遊歩」、ニーチェのスイス・イタリアの「漂泊」と比較した。シンポジウム全体としては、散歩を重要な「思考する方法」として歴史的・文化的に論じたといえる。

会場の席が足りなくなるほどの盛況となり、このシンポジウムの記録を残すべきと考えた。かくして当日のレクチャラーとコメンテーターに加えて、司会の法政大学理工学部教授・横山泰子に、改めて書き言葉で執筆していただき、2026年1月にEToS報告書16『東京を散歩哲学する』を刊行した。

また岡村は、個人研究として、法政大学国際文化学部紀要『異文化』26号（2025年4月）に「下北沢の「沢」を求めて柳田国男、萩原朔太郎、吉増剛造」を上梓した。これは、本プロジェクトで2024年1月26日に下北沢で開催した「下北沢の街歩き+クロストーク」における同題のトークを論文化したものであり、柳田の世田谷区のダイダラボッチ伝説研究、萩原の小説「猫町」、吉増の初期詩集を、下北沢の沢地形や水流への感性という角度から論じている。

シンポジウム「東京を散歩哲学する」で講演する島田雅彦氏

EToS報告書16『東京を散歩哲学する』

本年度の岡村と山道の共同のプロジェクトとしては、2026年3月29日に、「成城と下北沢から考える開発・自治・表象」と題して、シンポジウムを予定している。都市と郊外をつなぐ小田急線上の対照的な下北沢・成城エリアについて議論する。開発・自治・表象について議論をすることで街の成り立ちについて考える内容となっている。レクチャラーとしては、

- 山道拓人（法政大学/ツバメアーキテクツ）：マップ・建築プロジェクトから比較する
- 皆川典久（東京スリバチ学会 会長）：地形的観点から見た下北沢と成城
- 金谷匡高（法政大学江戸東京研究センター客員研究員、昭和女子大学歴史文化学科非常勤講師）：成城の住宅地形成と空間変遷史
- 向井隆昭（小田急電鉄エリア事業創造部課長代理）：小田急の沿線まちづくり、下北沢エリアでの取り組み
- 石神隆（法人格成城自治会副会長）：成城100年の流れ一開発・住民・自治一
- 岡村民夫（法政大学国際文化学部教授）：文化人の成城／下北沢　柳田国男、萩原朔太郎、大岡昇平を中心に
- コメンテーター　山崎修平（詩人、文芸評論家）

を予定している。

山道の個人研究としては、2025年度に刊行させた山道ほか編『シン町家百科』（盆地Edition、2025年）に、さらに、都市・町家・フィールドワークに関する歴史的な参考文献をまとめたブックレットを付録として作成した。重要な参考文献として、

- 『京の町家』（島村昇+鈴鹿幸雄、1971年）
- 『京町家ーコミュニティ研究』（上田篤編、1976年）
- 『日本の民家ー一九五五［普及版］』（二川幸夫、2012（1962）年）
- 『町屋と町人の暮らし 図説江戸3』（平井聖監修、2000年）
- 『京都人が知らない京町家の世界ー「京町家カルテ」が解く』（大場修、2019年）
- 『住み継ぐ家づくりー住宅リノベーション図鑑』（魚谷繁礼建築研究所、2016年）
- 『日本の都市空間』（都市デザイン研究体、1984年）
- 『復刻デザインサーヴェイー『建築文化』誌再録』（明治大学神代研究室+法政大学宮脇ゼミナール、2012年）
- 『都市を読む イタリア』（陣内秀信、執筆協力：大坂彰、1988年）
- 『Window Scape2 窓と街並みの系譜学』（東京工業大学塚本由晴研究室編、塚本由晴/能作文徳著著、2014年）
- 『戦後東京と闇市-新宿・池袋・渋谷の形成過程と都市組織』（石榑督和、2016年）
- 『生きた景観マネジメント』（日本建築学会編、2021年）

などに触れ、レビューを書いている。

岡村民夫（おかむら　たみお）

1961年横浜生まれ。立教大学大学院文学研究科単位取得満期退学。法政大学国際文化学部教授。表象文化論、場所論。著書に『旅するニーチェ リゾートの哲学』（白水社、2004年）、『イーハトーブ温泉学』（みすず書房、2008年）、『柳田国男のスイス ー 渡欧体験と一国民俗学』（森話社、2013年）、『立原道造 ー 故郷を建てる詩人』（水声社、2018年）、『宮沢賢治論　心象の大地へ』（七月社、2020年）など。宮沢賢治学会イーハトーブセンター会員、四季派学会理事、表象文化論学会会員。

山道拓人（さんどう　たくと）

1986年東京都生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。ツバメアーキテクツ代表取締役、法政大学デザイン工学部准教授。代表作に「下北線路街BONUS TRACK」「ツルガソネ保育所・特養通り抜けプロジェクト」「天窓の町家ー奈良井宿 重要伝統的建造物の改修ー」「NHK Media Design Studio」「パナソニックのデザインスタジオ FUTURE LIFE FACTORY」など。

④

Project 4

地図プロジェクト

法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授、プロジェクトリーダー　福井恒明
法政大学デザイン工学部建築学科准教授、プロジェクトリーダー　山道拓人

今年度より、江戸東京研究センターは「都市のアイデンティティの再発見と近未来に向けての再評価」をテーマとして新たなステージに入った。そのアプローチとして、近年急速に発達した地理空間情報技術、すなわち地図を用いて「江戸東京の再発見」を目指し、本プロジェクトを開始した。

その題材として、江戸東京研究センターの設立当初に北山恒氏をプロジェクトリーダーとする「都市東京の近未来」プロジェクトにて作成された「紐マップ」を取り上げた。紐マップとは、東京23区内の商店街をプロットした地図である。新型コロナウイルス流行により現地調査が制約された状況下で、学生がGoogleストリートビューを丹念に確認し、店舗が続く街路をトレースして作り上げた労作である。毛細血管のような商店街が東京都心を覆い、地形とも水系とも異なり、これまで見たことのない東京の姿が表現されている。しかし、これだけでは東京のアイデンティティとして何を読み取ったらよいのか、何がその構造を作り上げているのかを知ることは困難である。地図プロジェクトでは、この紐マップにさまざまなレイヤーの地図データを重ねることで、分野横断的に浮き彫りになるものを探すことに取り組んだ。

まず取り組んだのは、データフォーマットの統一である。図面やグラフィック、地図を扱うソフトウェアの種類は多く、元となる情報や作業者の習熟度によって、建築用のAutoCADやVectorworks、グラフィック用のAdobe Illustrator、地図を扱う専門ソフトであるArcGIS・QGISなどが使われている。紐マップはCADとIllustratorを用いて作られており、すぐに地図データと重ねることができない。そのため、紐マップをGISのフォーマットに変換して地図として取り扱う作業から開始した。分析の際にデータエラーが起こらないよう、統一的なデータ形式に変換するための手順を定める作業に数ヶ月を費やした。

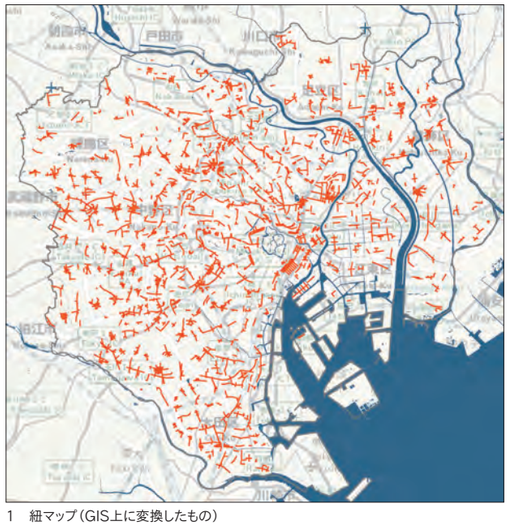
ある程度手順が見えたところで、大まかな分析方針を定める作業を実施した。商店街のプロットに、地形データ、鉄道・駅のデータなどを重ねた。ここからGISソフトの活用が可能になる。駅の徒歩圏内に位置する商店街を除外して可視化したところ、「独立系」とも言える商店街が一定数存在していることが地図上に浮かび上がった。

この独立系商店街がどのような経緯で成立してきたのか、研究メンバーで分担して情報収集を行った。地形条件や由来の整理、古地図による成立経緯の検討を行い、それらを持ち寄って議論を重ねた。その結果、これらの商店街は地形や古くから存在する街道・寺社・学校・病院・工場などによる極めてローカルな人の流れから店が集まり、商店街化してきたことが徐々に明らかになってきた。

たとえば戦後建設された団地周辺には、日常の買い物のための小規模な商店街がある。また、23区西側では農地を住宅地として開発する際にその端部に形成されたと考えられる商店街がある。都心部では、現在は暗渠化された小河川沿いにみられる商店街や、繁華街につながる街路沿いに発達したと思われる商店街がある。

商店街と言えばまずは駅周辺など多くの人が行き交う交通網の拠点に関するもの、あるいは東海道や中山道などの主要な道沿いにあるものが想起される。しかし鉄道網のような強い秩序とは異なり、いくつかの条件が重なって発生したと考えられる独立系商店街は、生活者目線での東京のアイデンティティに関わるものと考えられ、江戸東京研究センターにとって非常に興味深い対象である。

以上のように、今年度は分析を行うためのデータ形式の整理を行い、試行的な分析によって独立系商店街を抽出し、興味深い対象となりうる可能性を見いだした。次年度以降は、網羅的な整理によって地図化を進める一方、具体的な独立系商店街をいくつかピックアップしてワークショップ的な作業を通じ、東京におけるその価値を議論することなどを検討している。それらの結果を踏まえて最終的にはマップとして魅力的なアウトプットを製作する予定である。



1　紐マップ（GIS上に変換したもの）

2　独立系商店街の分布

福井恒明（ふくい　つねあき）
法政大学デザイン工学部教授
1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。博士（工学）。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『土木デザイン』、『景観用語事典』等。千代田区景観アドバイザー、最上川左沢・四万十・葛飾柴又・佐渡の文化的景観に関わる。

山道拓人（さんどう　たくと）
1986年東京都生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。ツバメアーキテクツ代表取締役、法政大学デザイン工学部准教授。代表作に「下北線路街BONUS TRACK」「ツルガソネ保育所・特養通り抜けプロジェクト」「天窓の町家ー奈良井宿 重要伝統的建造物の改修ー」「NHK Media Design Studio」「パナソニックのデザインスタジオ FUTURE LIFE FACTORY」など。

⑤

Project 5

外濠市民塾

法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授、プロジェクトリーダー　福井恒明

1. 2025年度の活動概要

外濠市民塾は、法政大学・東京理科大学・日本大学等の学生とDNP社員の方を中心に活動している。活動開始から14年目となる今年度は、外濠に関する活動を行っている他団体との活動連携を中心に実施し、これらを通じて、コロナ禍以来課題となってきた学生メンバーの外濠に関する知識やイベント実施のノウハウを強化した。

2025年度には9回の運営委員会を開催した。運営委員会は対面とオンラインを併用して実施し、活動の準備や進捗報告、関連する外部イベント等の情報共有、意見交換等を行った。具体的な活動は学生が企画運営を行っており、まちあるきチーム、Web運営チーム、水上利用チームに分かれて実施している。

今年度の具体的な活動として、学生を対象とした計3回の勉強会とまちあるきを実施した。外部と連携した活動として、ひじりばし博覧会2025への登壇（高道昌志氏）とパネル展示を行った。また、外濠EXPO2025にて活動紹介を行った。東京都が主催する「外濠の水辺再生事業に関する都民勉強会」では、米家志乃布センター長と共に企画段階から協力し、歴史ツアーや振り返りのワークショップを実施した。

昨年度から作業を進めてきたウェブサイト再構築が完了し、定期的なコンテンツ更新体制を整えた。関連する活動として支援している外濠水上コンサート「奏」については、準備を進めたものの荒天予報のため中止とした。

2. 外濠新名所［案外］三十六景の公開

昨年度実施した第15回外濠市民塾「路上で発見！！わたしたちでつくる外濠新名所」では、講師に林丈二氏を迎えて「外濠新名所36景」を選出した。その後、一般公開を前提として私有地の事例を入れ替え、写真の再撮影を実施した。その成果として外濠周辺に散らばる“案外”いいかもしれない小さな“名所”をまとめた案内「外濠新名所［案外］三十六景」を外濠市民塾ウェブサイトで公開した。また、市民塾の実施状況ムービーも同時に公開した。

福井恒明（ふくい　つねあき）

法政大学デザイン工学部教授

1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。博士（工学）。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『土木デザイン』、『景観用語事典』等。千代田区景観アドバイザー、最上川左沢・四万十・葛飾柴又・佐渡の文化的景観に関わる。

外濠新名所［案外］三十六景（部分）

3. 学生主体の勉強会とまちあるき

外濠市民塾では、運営メンバーである学生自身の外濠に関する理解を深めるため、継続的に外濠周辺のまちあるきを行っている。

第1回まちあるき（2025年6月8日）は16名が参加して実施した。永田町から飯田橋まで、水面が残る4つの濠を踏破した。終了後は法政大学市ヶ谷田町校舎にて振り返りを実施した。まちあるきの中で発見したスポットを、歴史の継承・認知のしやすさ・居心地の良さなどから整理して共有した。

第2回まちあるき（2025年10月19日）では、浅草橋からお茶の水までの神田川沿いを歩いた。終了後は前回同様に法政大学市ヶ谷田町校舎で振り返り作業を行った。

このほか、2025年8月3日には高道昌志氏によるレクチャーと市ヶ谷・飯田橋周辺のフィールドワークを行い、外濠の魅力と今後の外濠市民塾の活動方針に関する議論を行った。

4. ひじりばし博覧会2025・外濠EXPO2025

東京文化資源会議が主催する「ひじりばし博覧会2025」（2025年5月5日）では、パネルディスカッション「首都東京は世界的な観光防災都市になれるのか」に高道昌志氏がパネリストとして登壇し、地域資源としての外濠の位置づけについて紹介した。また、「外濠四季絵巻2036」のパネル展示を実施し、「外濠vision2036」のパンフレット配布を行った。外濠周辺に立地する企業が中心となって組織された外濠水辺再生協議会とは、これまでも活動への相互参加などを行ってきたが、残念ながら同協議会が解散することとなった。活動の総括として実施された「外濠EXPO2025」（2025年11月11日）では、外濠市民塾の活動について紹介した（福井恒明・一柳怜美）。また、外濠市民塾の活動紹介パネルを展示した。

5. 東京都「外濠の水辺再生事業に関する都民勉強会」への協力

東京都より米家志乃布センター長に対して、都民を対象とした外濠に関する勉強会企画について相談があり、外濠市民塾として全面的に協力を行った。さまざまな活動のアイデアが議論の対象となり、外濠の水質改良を目的とした薬剤散布のために設置されているフロート上でのイベントの可能性も検討された。最終的には米家センター長による外濠に関するレクチャーと、学生を中心とする外濠市民塾メンバーの案内による歴史ツアーを実施した（2025年11月15日）。

定員を大幅に超える申込があり、抽選によって選ばれた100名の都民が参加した。米家センター長による基調講演「江戸東京の歴史的財産を学ぶ」の後、高道昌志氏による歴史ツアーの説明を経て、9班に分かれて歴史ツアーを実施した。ツアーの案内と説明は外濠市民塾の学生が担当した。事前の下見や原稿付き説明パネルの作成など短期間ではあったものの密度の高い準備を行った。学生からは、緊張したがこれまでのまちあるきや勉強会の経験が生きて有意義であったとの感想が寄せられた。

6. 2026年度の活動計画

外濠の価値を高めるには、知識の共有だけではなく未来の構想も必要である。2026年度にはこれまでの活動に加え、学生等を対象とした外濠に関する提案（コンペ）の実施に向けた企画を進める予定である。

⑥

Project 6

江戸東京の島プロジェクト

東京都立大学都市環境学部都市政策科学科助教　高道昌志

本研究プロジェクトは、2023年度に開催したシンポジウム「島からみる江戸東京〜交流・広がり・領域」をきっかけとして結成されたものである。従来、江戸東京研究の枠組みにおいて、あまり関心が向けられてこなかった東京島嶼部に光をあて、江戸東京とのつながりや断絶、あるいは関係性や領域性という観点から島嶼を分析し、また同時に江戸東京の独自性や固有性を島嶼という外側の視点から捉えなおすことを目的としている。

プロジェクトの体制は、昨年度までに引き続き、担当研究員がそれぞれ個別に調査研究を重ねることで、江戸東京の島嶼部に関する知見を蓄積させている。今年度は大きなシンポジウムなどは企画されなかったが、それぞれの研究員の最新の研究成果を共有し、議論を進展させるための勉強会を開催した。

こうしたプロジェクト内での研究交流を通じて、人やモノ、文化や情報交流に関する江戸東京と島嶼部の関係性が、これまで以上に鮮明に浮かび上がりつつある。また、プロジェクトメンバーはそれぞれ、中心的に研究対象とする島が異なっているが、今回のような勉強会を行うことで、島嶼部全体に共通する同時代的な変化などが改めて確認された。

プロジェクトでは、個々の島の独自性を明らかにしていくことに加え、こうした島嶼部全体と都市東京を関連させながら捉えることで、都市ー島をひとつの文化的領域として位置づけていくことを目指している。そのため今回の勉強会のように、個別の島の事例を持ち寄りながら、そこに共通する部分と差異を見出していく試みは、本プロジェクトを発展させていくうえで有効な機会であることも確認できた。

以上、今年度は各研究員の研究成果をもとに、その共有をはかることで江戸東京の島への理解を深めることを試みた。今後の研究計画としては、まずは、引き続きメンバー間での勉強会を開催していくことを計画したい。そして、それを踏まえつつ、伊豆諸島の他の島や小笠原諸島、さらには東京湾の島々などにまで調査対象を広げながら、プロジェクトを進展させていきたい。

高道昌志（たかみち　まさし）

1984年富山県生まれ。2016年法政大学大学院博士後期課程修了。2018年より東京都立大学都市環境学部都市政策科学科助教。専門は近代都市史・建築史、まちづくり。東京を中心に水辺環境と住空間の歴史的変遷についての研究と実践活動を行う。主な著書に、高道昌志『外濠の近代〜水都東京の再評価』（法政大学出版局、2018年）がある。

プロジェクトでの調査対象地（伊豆大島・波浮港）01

プロジェクトでの調査対象地（伊豆大島・波浮港）02

プロジェクトでの調査対象地（伊豆大島・波浮港）04

プロジェクトでの調査対象地（伊豆大島・波浮港）03

プロジェクトでの調査対象地（伊豆大島・波浮港）05

⑦

Project 7

「Tokyo Time Travel」東京街歩きツアー事業

法政大学文学部地理学科教授、プロジェクトリーダー　米家志乃布

2023年度からの準備期間を経て、2024年度より江戸東京研究センター監修の「Tokyo Time Travel」の販売が始まりました。本企画は、法政大学江戸東京研究センター（EToS、エトス）が監修し、公益財団法人東京観光財団（TCVB）が実施する、外国人旅行者向けの、東京の歴史と街なみを楽しむ有料のウォーキングツアーです。

ツアーのコンテンツは、陣内秀信 特任教授、田中優子 特任教授、米家志乃布センター長が中心となって作成し、様々な史資料を用いた案内ルートの提案、猛暑のなかでの実踏、案内の通訳ガイドの方々への研修などを担当しました。2024年度より以下の5コースを催行しました。ツアーはすべて全国通訳案内士による英語で行われています。

① 銀座＆築地コース
出発地：帝国ホテル東京
ハイライト：銀座の路地、稲荷神社、歌舞伎座、築地場外市場など
江戸を基盤として、町人商人が生活を営む場として商業・エンターテインメントの発信地として発展してきた銀座・築地の町に残る痕跡を辿ります。

② 皇居＆江戸城コース
出発地：帝国ホテル東京
ハイライト：桜田門、東京駅＆丸の内周辺、東御苑など
江戸城を中心に据え、水路によって区切られていた街それぞれの役割、その名残を感じるとともに、東京と世界のほかの主要都市との違いを学ぶコースです。

③ 上野＆浅草コース
出発地：ノーガホテル 上野 東京
ハイライト：不忍池、上野東照宮、かっぱ橋道具街、浅草寺、浅草神社など
上野・東叡山寛永寺の膝元で発展してきた寺町、職人の町の活気を体感しながら、浅草へと続く歴史を振り返ります。

④ 上野＆谷中コース
出発地：ノーガホテル 上野 東京
ハイライト：清水観音堂、上野大仏、旧吉田屋酒店、根津神社、谷中銀座など
比叡山に見立てて創建された寛永寺の影響の残る上野と、その北側の東京の人々の生活の面影を残す下町風情を残す街として親しまれる谷根千を巡ります。

⑤ 渋谷コース
出発地：セルリアンタワー東急ホテル
ハイライト：金王八幡宮、宮益御嶽神社、円山町、鍋島松濤公園など
渋谷川の流れによって起伏に富んだ地形に育まれた生活・文化を感じつつ、渋谷のイメージをくつがえすような「江戸」の面影を探すコースです。

『新選東京名所図会』（EToS所蔵）掲載の歌舞伎座と現在の歌舞伎座

「Tokyo Time Travel」東京街歩きツアー事業は、2025年度でいったん終了し、2026年度以降、新たなかたちで再構築を目指していきます。

ツアー開催地

浅草エリア、上野エリア、銀座エリア、渋谷エリア

東京街歩きツアー事業の販売サイト

米家志乃布（こめいえ しのぶ）
法政大学文学部教授。
1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士（人文科学）。法政大学第一教養部専任講師，助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。著書に『近世蝦夷地の地域情報ー日本北方地図史再考』法政大学出版局2021年。分担執筆に「名所と視覚的経験ー江戸東京の風景」（江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年）。

シンポジウム

「東京を散歩哲学する」開催報告

開催日：2025 年 3 月 1 日（土）
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス大内山校舎 Y503（対面開催のみ）

2025年3月1日（土）法政大学大内山校舎Y503にて、法政大学江戸東京研究センター主催でシンポジウム「東京を散歩哲学する」を開催しました。
島田雅彦氏の近刊『散歩哲学のすすめ　よく歩き、よく考える』（ハヤカワ新書、2024年）のインパクトを受けて立てた企画です。歴史的に省みることを通し、散歩が、他者や無意識のフィールドワークであり、さまざまな過去の層へのタイム・トラベルであり、より自由に考え、生きるための技芸（アート）であることを浮かび上がらせたいと考えました。
江戸東京研究センター兼担研究員の横山泰子氏（理工学部創生学科教授）の司会のもと、島田雅彦氏（国際文化学部教授、小説家）、伊東弘樹氏（早稲田大学教育研究科後期課程、近代文学研究）、江戸東京研究センター・プロジェクトリーダーの岡村民夫（国際文化学部教授、表象文化論）が講演しました。

島田氏は「チャランポランへの誘い」で、よく散歩をし、散歩を題材にした作家として、シャルル・ボードレール、ニコライ・ゴーゴリ、フョードル・ドストエフスキー 、萩原朔太郎、古井由吉などの事例を紹介し、ご自身が街歩きで親しんできた外国都市としてヴェネツィアのことを語りました。在外研究中に住んだ家やバーカロ（立ち飲み居酒屋）めぐりについて具体的エピソードが披露され、会場に笑いが広がりました。ヴェネツィアで迷いやすいのは複雑な路地のせいもあるが、中心軸であるカナル・グランデが直線的でなくS字に蛇行しているからだろう。最初はやたらと迷ってしまったが、迷う経験を通じて街が身体に浸透し、自由に感覚的に歩けるようになったとのこと。散歩の際、履き物を変えてみることや、設定したテーマに沿って連想ゲームをしてみること、自分の「ニッチ」を見出すこと、河原で石を投げてみることなどの提案がありました。とくに興味深かったのは、一見孤独な営みにみえる散歩に伴う多様なものとの交流を、繰り返し話題にされた点です。たとえば、居酒屋で地元の人と言葉を交わしたり、路上で道順を地元の人にたずねたりすることは、意義深い交流である。小鳥や道端のタンポポとも交流しようと思えばできるし、廃墟で過去へタイムスリップして、死者と交流することも稀ではない。作家がよく散歩をするのは、歩いている最中に思いがけない刺激を受け、新たな発想が生まれるからだ。島田氏は、人類は散歩をするかぎり進化する可能性がある、講演を締めくくりました。

伊東弘樹氏は「「境界」を問う散歩ー国木田独歩『武蔵野』」において、江戸時代以降、武蔵野がどのようなしかたで注目され、1900年代の独歩の「郊外の発見」へ展開したのか、そして独歩がどのような修辞法を通して武蔵野を呈示したのかを緻密に論じました。民友社系作家たちが東京近郊の親しみやすい風景として渋谷に関心を寄せていたという時代背景に促されつつ、独歩は、少年期に住んだ地方の山や清流からなる風景美から脱し、武蔵野の台地を巡る歩き方に馴染んだ。それは、生活と自然、都会と田舎が入り混じる中間に居場所を見出すプロセスでもあったとのこと。作家たちの渋谷住まいの背景に、戸建ての貸家業の隆盛や、官用地・軍用地が多かったことによるハイカラな雰囲気があったとする説は、新鮮でした。
伊東氏は、『武蔵野』の語りが対話形で「自分」と聞き手の「君」が登場し、「自分」と「君」が入れ替わるところもある点に着目し、こうした語りの修辞法は、読者と共同の風景を思い描くこと、つまりは読者を武蔵野好きにさせることに貢献したと論じました。最後に、独歩の「郊外」と、1990年代末に島田氏が表現した「郊外」が交錯する可能性が示唆されました。

岡村は「散歩哲学の先駆者　ニーチェ、柳田国男、萩原朔太郎」において、これら3人およびボードレール、西脇順三郎のあいだに、散歩哲学者ないし散歩詩人どうしの緩やかな系譜を示すことを試みました。19世紀半ば、パリの「遊歩者」ボードレールによって「初めてパリが抒情詩の対象となる（ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』）。1870年代末～90年代、病のために大学教授を辞したフリードリッヒ・ニーチェは、スイス・アルプスの高原と地中海都市を巡回する「漂泊」を、哲学の詩的表現と結びつける。彼らの「遊歩」と「漂泊」を自覚的に継承し、東京のさまざまなエリアを散歩しまわりながら都市的な抒情詩やアフォリズムや短編小説を書いた重要人物として萩原朔太郎を位置づけました。柳田と朔太郎のあいだに影響関係があったかどうかは不明ですが、関東大震災後の東京西郊外の住宅化を時代背景に、世田谷の小田急線沿線（柳田は成城、朔太郎は下北沢）に自分で設計した洋館を終の住処として建て、そこを拠点に東京各地を散策するようになった、という共通点があります。彼らの散歩が水脈に対する感受性と結びついていることや、そうした感受性がボードレールとベンヤミンにも認められるのも興味深いことです。英国留学の際に『悪の花』『ツァラトゥストラはこう語った』『月に吠える』を持参したという西脇順三郎は、帰国後の1930年頃から柳田と親交し、成城の国分寺崖線や、柳田と歩いた多摩川沿いが彼の文学にとって最重要な場所となりました。西脇は先行する散歩詩人・散歩哲学者の流れを束ね、戦後詩へつなげた詩人といえる、と岡村は結びました。

客員研究員の山﨑修平氏（詩人・文芸評論家）と特任研究員の陣内秀信氏（法政大学名誉教授、建築史・都市史）のコメントを受け、最後に講演者間の自由なクロストークを行いました。
想定を大きく超えた来場数で、会場の座席が足りなくなって補助席を設ける次第となり、ご参加者にご迷惑をおかけしてしまいました。東京を散歩する意義やそのスタイル自体を考えるというイベントは極めて稀なはずですが、多くの市民がまち歩きを実践するこんにち、ニーズが非常に大きいと認識しました。

（岡村民夫）

講演会

「江戸空間のなかの蔦屋重三郎」

開催日：2025 年 3 月 22 日（土）
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス富士見ゲートG503（対面開催のみ）

2025年は1月から12月までNHKで大河ドラマ「べらぼう」が放送されることになり、それに合わせて2024年10月に田中優子『蔦屋重三郎　江戸を編集した男』（文春新書）が刊行された。2025年3月22日（土）に開催された「江戸空間のなかの蔦屋重三郎」は、その刊行記念であると同時に、本書が明らかにできなかった「江戸」という都市空間の中での「動き」をテーマとするという、江戸東京研究センターならでは、の催し物であった。本や浮世絵を手にする人々がどのような認識を得ていたか、また、書き手や作り手が、江戸空間の中でどのように行動し得ていたかを、探る試みとなった。

第一部は「編集者としての蔦屋重三郎」の講演で、以下のように展開した。
蔦屋重三郎は吉原で生まれ育ち、吉原に最初の本屋を開いたことで、吉原を江戸の中で確かな「江戸文化」として位置づける、という編集を成し得た。そこでまず、蔦屋重三郎の仕事を以下のようにまとめた。

1. 吉原の年中行事を核に、吉原を「文化の別天地・発信地」とした。
2. 連の中に入って人と人をつなげ、連を出版に結びつけ、後世の日本人に「連」の存在を知らしめた。
3. 大首絵を普及させることで、浮世絵の中に「キャラクター（個性を持った独特の存在）」を立ち上げる仕掛けを作った。
4. 江戸文化を担うスターを生み出すことで、日本の中の「江戸っ子」と「江戸文化」に確かな位置を与えた。

その表れの一つが、1774年の遊女評判記『一目千本』である。遊女はこの本で、花に見立てられる江戸の著名人の仲間入りをした。吉原と遊女は蔦屋の仕事を通して、「江戸文化」そのものになっていったのである。『一目千本』は「出版物に付加価値を付ける」ことの延長線上にあり、さらに、吉原を文化的な天上世界に押し上げる意図を持って編纂された。
蔦屋重三郎は『吉原細見』の体裁も新しくし、浮世絵界の重鎮である北尾重政・勝川春章による『青楼美人合姿鏡』の刊行によって、吉原を日本の上質な伝統文化と結びつけ、その

位置を確実なものにした。さらに吉原で一ヶ月間続く祭である「にわかの祭」をドキュメントした『名月余情』で、吉原の面白さと賑わいを江戸の人々に知らせた。
蔦屋重三郎はこれだけでなく、他の版元が出さなくなった狂歌本を次々と刊行し、「狂歌」とその連を、当時の人々に届け、後の世にも「連」の大きな意味を届けたのである。さらに「大首絵」によって、喜多川歌麿の浮世絵と東洲斎写楽の浮世絵を世に送り出した。その全体が、上方文化からようやく独立した「江戸文化」を、この世に出現させたのである。

本講演ではそれらのことを単に蔦屋重三郎個人の「天才による業績」として紹介したのではない。この講演の基本に以下を置いていた。

1. 読書の時代を生み出した書籍印刷の展開
2. 浮世絵を生み出したカラー印刷技術
3. 江戸時代の「創造」の仕組み「連」
4. 「学び」が作った江戸時代社会
5. 芸能とアートの拠点となった遊廓と芝居

蔦屋重三郎の仕事は、江戸時代初期に生まれた印刷技術、浮世絵の歴史とそのカラー化、江戸の人口の半分を占める武士たちを中心に成り立った「連」の仕組みの歴史、江戸時代の識字率と知性を押し上げた手習いと藩校・私塾、文化の源泉となった「場」である芝居町と遊郭があってこそ、成し得たことだった。つまり文化や技術の積み重ねと集積こそが、次の創造につながるのである。
講演は、その文化史と、それを使って編集した蔦屋重三郎の編集力をテーマとした。

続く第二部は、田中優子・小林ふみ子による対談を、各版元の所在地および作者・狂歌師・浮世絵師の居所を示した地図を見ながら展開した。
住所・所在地についての情報は、第一次史料たる国立国会図書館所蔵、瀬川富三郎編『諸家人名　江戸方角分』（文政元・1818年大田南畝写）、および井上隆明著『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂書店1998年）、国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』（東京堂書店2008年）、その他、作者や絵師の個別研究によって町名・丁目を特定。これを各種地名事典類と人文学オープンデータ共同利用センター作成「江戸マップ」https://codh.rois.ac.jp/edo-maps/を参照しながら、享和3（1803）年の須原屋茂兵衛版「分間江戸大絵図」に落としこんだものである。
まず、1.「版元なかまのなかの蔦屋重三郎」として日本橋周辺およびその他の地域の版元との位置関係を探った（下図はその一部）。
日本橋通1～3丁目、本町1～4丁目から大伝馬町へと続く通りおよびその周辺に版元が集中していること、日本橋からの距離と版元の「格」のようなものになにがしかの相関性が見られることなどについて語りあった。

続いて2.「戯作者・狂歌師・浮世絵師と蔦屋重三郎」として作者・絵師等との位置関係を探った（下図はその一部）。浮世絵師たちが版元のごく近隣に住む傾向があること、通笑・一九といった戯作者も同様で、居所から職人的な職業性がうかがわれることなどについて考察した。
位置関係という視点から版元や作者・絵師をとらえ直すことで、彼らの仕事ぶりへの解像度があがる企画であった。

（田中優子・小林ふみ子）

研究会
「島嶼プロジェクト研究会」

開催日：2025 年 11 月 16 日（日）
場所：目白台の家（旧池田家住宅）

本研究会は、東京湾の島々をはじめ、伊豆諸島、小笠原諸島といった東京島嶼部を研究の主な対象地域としながら、島に焦点を当てた研究を展開する研究者による研究成果の報告や、江戸東京の島に対する理解を深めるための議論・交流を行っている。
今回は特に、伊豆諸島に焦点をあて、新島の「コーガ石」による建造物群とその集落構造、大島の「天水井戸」を利用した雨水による庭園空間に着目した二つの研究報告から、島固有の資源や環境特性によって形成された建築や生活文化について、学際的な観点から議論を深めた。
まず、金谷匡高氏から、「新島村における集落構造の解明とコーガ石建造物群の歴史的再評価ー近代期の資料調査及び実測調査を通してー」と題した研究報告が行われた。新島本村集落において近代以降に普及した村の固有資源であるコーガ石の利用が集落景観に与えた影響について、実測調査の成果と豊富な古写真によって説明が行われた。町の景観がコーガ石の街並みに大きく変わるのは、コーガ石が産業化した大正期から昭和初期であり、この時期に敷地西側にコーガ石の建屋が並ぶようになったこと、また、戦後にかけて頻繁にコーガ石建造物の増築・改築が行われ、徐々に現在の町並みが形成されていったことが指摘され、コーガ石の加工の容易さとの関係についても言及があった。さらに、離島ブームが始まった昭和40年代には、自動車の普及による道路整備や、村の補助金事業によるコーガ石の石塀の増加があり、通りをコーガ石の景観へ変化させた大きな要因として述べられた。

金谷匡高氏の研究報告の様子

次に、内藤啓太氏から、「雨水を利用した伊豆大島の庭園ー旧甚の丸邸を中心にー」と題した研究報告が行われた。伊豆大島・波浮港に残る旧網本の住宅である旧甚の丸邸の庭園を対象に、雨水の貯水タンクである天水井戸を水源とする独自の水利システムが庭園空間にもたらした役割について、主に現地調査の成果から説明が行われた。同庭園には枯池と滝石組が設けられ、天水井戸から導水された雨水が池へ供給されていたことが確認できた発掘調査の様子が紹介された。また、主屋の増改築の変遷と庭園の成立時期を関連づけ、明治中期には既に現在の庭園構成が成立していた可能性についても述べられた。また、庭園の意匠には島外からの影響がみられる一方で、天水井戸を利用するという大島ならではの水環境に対応したエコロジカルな庭園としての独自性が指摘された。こうした天水井戸を利用した庭園が、明治から戦前期の大島において他にあったかどうかについても話が及んだ。これについてはまだ発見できていないことが述べられた。一方で、（水があったかどうかは不明だが）少なくとも他にも庭園がつくられていたことが、主に旅館などの複数の事例から確認できることが古写真や現地写真を用いて紹介された。

内藤啓太氏の研究報告の様子

研究報告後、全体討論では、金谷氏と内藤氏の相互コメントからはじまり、以下のような視点から活発な意見交換が行われた：

・主屋の間取りの共通性と屋敷を構成する要素（前庭、蔵、隠居小屋、稲荷など）の違い
・分家がどのように広がり、集落を形成していったのか

・応接の場として庭園の必要性
・庭園文化は大島独自のものなのか
・港町としての性格が強い波浮（大島）と集落としての性格が強い新島を含む他の離島
・下田をはじめとした伊豆半島とのつながりと影響
・新島と伊豆韮山の代官・江川家とのつながりが近代にどう変化していったのか
・近代化の過程で島嶼固有の資源と外来の技術や資源が交錯し、ハイブリッドな空間が生まれたこと
・伊豆諸島におけるセメントの導入時期の早さ

全体討論の様子

最後に、本研究会では、新島と大島という異なる島嶼環境において、それぞれ「コーガ石」と「天水井戸」という地域資源をキーワードに、集落と庭園という異なるスケールの空間形成にどのように関わってきたかを比較検討する機会となった。両研究はいずれも、文献調査に加え、実測・発掘・聞き取りといった多角的な手法を用いており、東京島嶼部の生活空間の独自性を浮き彫りにしている。一方で、内地や周辺の島からの影響がどのくらいあったのかについてはまだ多くの研究の余地があり、東京湾を含む島嶼ネットワークの中での各島の位置づけも含めて、今後の島嶼プロジェクト研究会において、さらに探求していく必要性が確認された。

（内藤啓太）

シンポジウム

「江戸東京の大名庭園をめぐって ―つくられ、描かれ、受け継がれる空間―」

開催日：2026 年 1 月 10 日（土）
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス大内山校舎 Y406 及びオンライン（Zoom）

本シンポジウムでは、江戸東京独自の特徴といえる大名庭園をテーマとし、文理のさまざまな学問領域の研究者による報告をベースに、絵図や文字による記録ないし表象、その空間の実態にいたるまで、多角的な視点から検討・議論しました。まず小林ふみ子氏（法政大学 文学部／江戸東京研究センター）より趣旨説明があり、その後6名の研究報告がありました。

まず、岩淵令治氏（学習院女子大学 国際文化交流学部）は、松平定信が作庭した庭園について、見せる庭として浴恩園、個人の庭として大塚六園を取り上げ、作庭意図や利用の実態を論じました。見せる庭はモデルコースが設定されているが、季節ごとの対応や客の属性・好みにより、固定的な回遊ルートに固執しない大名庭園のポテンシャルを視座しました。個人の庭としての大塚六園は、見せる庭に対して、集古園としてバックヤード的な役割を持ち、庭園ごとに機能を分けている側面がある一方で、一つの庭にも要素が共存している可能性を示しました。

続いて、内藤啓太氏（東京農業大学 造園科学科／江戸東京研究センター）は、神田・玉川両上水を主とする江戸の上水によって大名庭園につくられた景を、屋敷の機能毎に解き明かしました。特に上水の主要な給水範囲であった江戸城周辺の上屋敷では、御殿空間の変化に伴って、庭園の改変や新規造成がみられたことから、建物が密集していた中でも上水があったことで柔軟に庭園をつくり出していた可能性を指摘しました。一方で、下屋敷では、屋敷内を占める庭園の面積が大きく、水量の問題から上水以外の水源をベースとしていましたが、上水を併用する利用形態によって低地においても滝や吹井などの山の景を作るものもあったことを示しました。江戸の大名庭園では利用される水源が、結果として生み出される空間に大きく関わり、多様な庭園群が形成されたことを指摘しました。

野田麻美氏（神戸大学 大学院人文学研究科）は、狩野養信を中心とする江戸後期庭園画について、江戸狩野派は、地取に基づいて現実の景観を描く一方で、大名の追い求めた庭園の理想的な情景描写を表現することを常に試みていたことを論じました。養信が当時流行していた写実的表現を取り入れつつ、膨大な模写を行っていた古絵巻の図様や表現も用い、理想的でありながらも現実を映す庭園画様式を追求し、江戸狩野派らしい大名庭園画のスタイルを完成させたということを指摘しました。また、養信の大名庭園画は、江戸絵画において実景を写すことと、その理想化のバランスが大きな問題だったことを端的に示す点で、当時における風景表現の模索の成果としても極めて重要な作品群であると述べました。

真島望氏（熊本県立大学 文学部）は、近世名所としての大名庭園は『続江戸砂子』をはじめ、享保期頃から地誌に登載し、しばしば、林羅山・鵞峰・鳳岡をはじめとする林家の詩文がその名所性を担保するものとして利用されていることを指摘しました。地誌に精通していた大名・池田定常の著作であり、庭園に焦点を絞った地誌『江戸名園記』は、近世後期には大名庭園が江戸の重要な名所となっていたことを示すものであるとし、『続江戸砂子』に言及している点や、庭内の美しさや眺望などの景観だけでなく俗信や説話など多様な文化が記されている点も重要であると述べました。

畠山望美（法政大学 デザイン工学部／江戸東京研究センター）は、現在まで受け継がれた江戸東京の大名庭園として、イタリア大使館を例に報告しました。大名庭園から邸宅へ、その後、国内にありながら管理は外国で大使の邸宅とパブリックな空間を兼ねている大使館となり、その時代によって様々な役割を内包しながら、建築と庭園が相互に関わり合い、技術発展やインフラ設備などの外的影響も受けて更新されながら、今日まで受け継がれてきたプロセスを示しました。イタリア大使館の庭園は、大名庭園を受け継いだ庭園として歴史的な価値があるだけでなく、継承されてきた過程や背景にも、江戸東京の大名庭園としての特質を見ることができると述べました。

竹内智子氏（千葉大学 大学院園芸学研究院ランドスケープ・経済学講座）は、松平定信が最後に作庭した「深川海荘」については、国際的な海防拠点、物流・防災の拠点、風光明媚な風景を楽しむ場として、単なる別荘庭園ではなく広域的な都市スケールで考えられた空間デザインであったことを指摘しました。そうした大名庭園を現代の都市政策へ接続するための取り組みとして、庭園周辺の超高層ビルに対して高さの配慮や色彩・広告を規制する制度、再開発を活用した周辺の整備、ARやライトアップなどの現代技術を使用した景観の復元、高層ビルからの俯瞰景という新たな価値の発見が紹介され、江戸の知恵を再発見し、歴史・水系を軸とした「文化財庭園都市」の社会実装していくことが、これからの研究を生かすことになると語りました。

報告後、以下、3名のコメントがありました。

高村雅彦氏（法政大学 デザイン工学部／江戸東京研究センター）は、建築学の観点から、庭園は東アジアにおける空間と思想の建築学といえるとし、大名庭園の源流を探るべく、中国の庭園や思想と日本との類似点や相違点が紹介されました。朱舜水をはじめとした日中文化・思想の盛んな交流の上に両国の庭園が展開していると述べ、今後は日中の比較、あるいは京都と江戸の比較を、造園史の分野だけでなく建築・都市分野からも行うことが重要であると指摘しました。

陣内秀信氏（法政大学 江戸東京研究センター）は、回遊式庭園は風景としての自然が入り込んでおり、様々な景を庭園の中に集積することは、多様な自然条件や地形を持つ日本固有のものである可能性を指摘しました。都市がないことには庭園が生まれないと述べ、ヨーロッパでは中世以後は城壁の中は煉瓦や石で人工化するのに対し、江戸では、濠、神社などのパブリックスペースの緑地や執務空間である上屋敷にも庭園を設け、都市の中にいながら自然と繋がるというメンタリティを感じ、都市論としても重要であると語りました。また、イタリアのヴィッラとの比較から、江戸の庭園は箱庭的と言われる一方で、築山を作り眺望を設けるなど外への意識を

向けていると論じました。
田中優子氏（法政大学 江戸東京研究センター）は、大阪の文人・木村兼葭堂による庭園画を使用した朝鮮通信使との交流があったこと、それが理想や美意識を言葉や絵画で共有しやりとりする文人によるものであったことから、日中韓の強靭な文人のネットワークが江戸にあったことを指摘しました。また、大名庭園という空間には絆があり、人間関係があり、交流の場であったはずであると述べ、それを考察することで、江戸の中の文人的な交流をはじめとする様々な交流とはまた別の文化的な交流が見えてくるのではないかと語りました。
会場・オンラインともに多くの参加をいただいたことは、大名庭園への関心が大きいことの表れであると感じるとともに、文理のさまざまな分野の研究視点から複眼的に分析することで、大名庭園の今後のさらなる研究の広がりが期待できるシンポジウムとなりました。この成果は報告書としてまとめることを予定しております。

（畠山望美）

報告会

「江戸東京研究センター2025年度報告会」

開催日：2026 年 3 月 1 日（日）
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス富士見ゲート G503（対面開催のみ）
11：00 ～ 16：00

2025年度報告会のプログラムは、①次年度の研究計画をメンバーで話し合うビジネスミーティング、②若手研究者による2本の研究発表、③本センターの三つのメイン・プロジェクトの報告、さらに④特別プロジェクトの報告となりました。
午前に行われたビジネスミーティングでは、次年度の研究活動にむけて話し合いが行われました。センターのメインテーマとして「江戸東京のトポグラフィー/トポグラフィア」を掲げ、次年度はメンバーによるEToS叢書の出版を企画することになりました。
午後の研究報告では、まず、高村研究室の藤原玄明氏から、「戦前期の高円寺―台湾人作家翁閑（オウドウ）の『東京郊外浪人街―高円寺界隈―』の資料を中心に―」と題した研究発表が行われました。戦前日本において、日本語を話し、著作を記した中国系知識人の活動が、戦後の研究において見過ごされてきたこと、それに注目していく必要性が述べられました。本研究では、知識人個人の著作に表現された街の様子を紐解くという切り口から、火災保険図や古写真などから昭和10年代の街の様子を復元し、さらには当時の高円寺における東京郊外における高円寺の地域史研究に展開しました。発表後の質疑応答では、当該地域が江戸期において宗教的影響が薄かったことが、近代以降の都市的な発展につながった可能性が指摘され、有意義な議論となりました。
次に、景観研究室の岩田健吾氏と江戸東京研究センター客員研究員の宮澤諒氏による「紐地図」プロジェクトの成果が報告されました。この「紐地図」は、かつて北山研究室のメンバーがCADで作業したものであり、そのデータをGISに変換することが今年度の主な作業でした。今回は、まず、岩田氏からは、東京都区内の商店街を駅周辺・街道宿場・神社周辺に分類し、それに該当しない商店街を「独立型商店街」として抽出したことが示されました。その「独立型商店街」の事例として、宮澤氏からは「桐ヶ丘中央商店街」と「日の出会商店街」が紹介されました。具体的な事例にもとづき、「独立型商店街」の成立要因、現在までの変容、空間軸だけでなく時間軸の導入など、様々な議論が展開しました。
メイン・プロジェクトの報告では、第1プロジェクト「地理情報システムと名所の景観」（福井恒明教授・米家志乃布教授）では、一昨年の「東京の史跡」シンポジウムでの報告をもとにした出版企画が実現したこと、引き続き名所研究の出版にむけての作業経過が報告されました。第2プロジェクト「都市表象史」（小林ふみ子教授・高村雅彦教授）では、1月に行われた「大名庭園」シンポジウムの開催報告、それに基づいた出版企画についての報告がありました。第3プロジェクト「表象文化と近未来デザイン」（岡村民夫教授・山道拓人准教授）は、昨年度末に開催した「東京を散歩哲学する」シンポジウムとその発表をもとにした研究成果報告書の出版、さらに3月末には「成城と下北沢から考える開発・自治・表象」シンポジウムを計画し、その報告をもとに、成果集を刊行する予定であることも報告されました。メイン・プロジェクト横断型の「地図」プロジェクト（福井・山道・米家）では、2025年度は主に東京商店街「紐マップ」のGISシステムによるデータの取り込みが行われました。次年度はグラフィックデザインを検討していく予定であることも報告されました。
最後に、特別プロジェクトである「外濠市民塾」（福井恒明教授・江戸東京研究センター客員研究員の高道昌志氏）と「江戸東京の島」プロジェクト（高道昌志氏）の報告がありました。外濠市民塾は、2025年度は外部組織と連携した事業が盛んに行われるとともに、一昨年のイベントである「外濠新名所」もWeb上で公開されました。次年度は、学生主体による外濠デザインコンペを開催予定であり、水辺の街の理想像を描く活動を展開したいと考えているとのことです。島プロジェクトでは、2025年秋にはメンバーによる勉強会を開催し、さらに伊豆大島の波浮港における歴史的建築物の再生と保存活用に関する企画を立案していることが紹介されました。
報告者の皆様には、素晴らしい研究活動や計画を披露していただき、大変有意義な会になりました。心より御礼申し上げます。

（米家志乃布）

講義

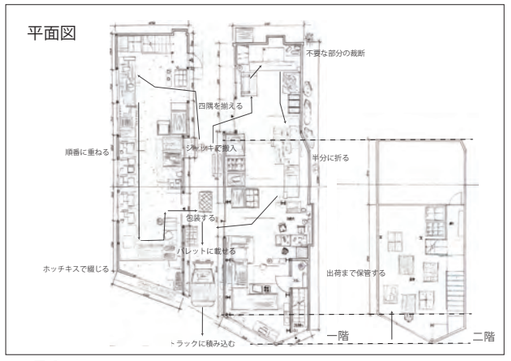
「フィールドワーク」

江戸東京研究センターにあって、学生を中心とする学内のブランディング事業、つまりインナーブランディングはもっとも重要な活動となる。デザイン工学部建築学科では、学部3年生に演習講義名「フィールドワーク（建築）」を設けている。学生たちが主体的に東京の街に出て、面白そうなもの、価値のありそうなものを見つけ出し、実際のフィールドを通して都市や建築の歴史を考えていくのである。具体的には、地図や様々な史料を使いながら歴史的なまちの分析、あるいは住宅などの建物の実測調査と作図、模型製作を行う。こうした作業を通じて、たんに分析方法や実測の知識を身につけるだけでなく、都市や建築の歴史的価値を見出し、その保存や再生がいかに創造的な行為であるかを理解することが目的となる。

（高村雅彦）

野瀬商店

模型写真



文京区紙工場

鳳明館　全体写真

東照宮第一売店

メインパース　正面玄関　玄関横看板

玄関・ロビー　ロビー・お土産売り場　スレート屋根・増築

本郷鳳明館本館

講義

「都市解読方法特論ー東京発掘プロジェクト 水辺編」

東京発掘プロジェクト2025「東京水辺再生プロジェクト」

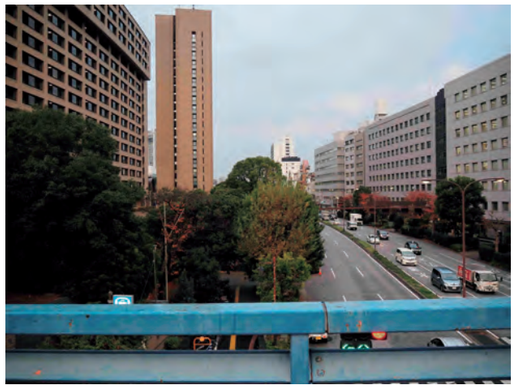
東京の地下には歴史的遺構が数多く眠っている。そうした遺構を仮想的に掘り起こし、現代都市の中に位置づけ、再定義によって都市の将来像を模索する野心的な試みを「東京発掘プロジェクト」と称して7年間の活動を続けている。遺構とは江戸城の歴史的遺構はもちろんのことで、近代になってから埋められた運河や水路なども含んでいる。2025年度は「東京水辺再生プロジェクト」と題して、東京の水辺および公共空間の中でも価値が高く、まちづくりに結びつくようなエリアを対象として、分野横断的な研究と具体的提案を行った。ディスカッションの結果、選定したエリアは「築地場外市場」及び「外濠・神楽河岸」であった。

「築地場外市場」は、市場が豊洲へ移転した後も、観光客でにぎわい続けるエリアだ。隣接する築地市場跡地の再開発計画が注目を浴びながら進む中、取り残された感が漂う。現在は、老朽化した低層建物が徐々に取り壊され、マンションやホテルなどに置き換わりつつある。「らしさ」が失われつつあり、まちの今後の在り方について、もっと議論が必要と思われるエリアだ。また、広場などの公共空間に乏しく、火災に対して脆弱な点も課題である。そこで、この地にあった築地川を復活させ、水辺の再生と、ありうる未来構想を模索した。築地市場の跡地は、5万人のスタジアムの他、超高層ビル群による大規模再開発が進行中であるが、「土地の記憶」の継承が計画に感じられないため、そのオルタナティブを模索した。すなわち更地にしてからの開発ではなく、更新型の再開発モデルを模索したが、その域には到達できなかった。全国で問題視されている駅前大規模再開発に代わるテーマゆえ、今後も継続的に取り組んでみたい。

「外濠・神楽河岸」では、戦後の再開発によって蓋をされてしまった外濠の一部である神楽河岸の復活を模索してみた。神楽河岸が復活できれば隅田川からの舟運に利用でき、江戸城外濠といった歴史遺産の再生にもつながる。水辺の公共空間は、エリアの名所になるに違いない。合わせて幅員にゆとりがある外堀通りの車線を減らし、歩道の拡幅やポケットパークの創出などを想定した結果、なかなかユニークな将来像を描くことができた（モンタージュCG参照）。遺構再生のモデル事例になり得ると確信している。

いずれのテーマも、過去を知り現状の課題を把握したうえで、近未来の道筋を示す実践的な研究であった。都市の記憶を創造へつなげる取組みとして、さらなる深度化を模索したい。

（皆川典久）



現状：神楽河岸とよばれた外濠は蓋をされ公園に整備されている

提案：神楽河岸復活と外堀通り公園化のイメージ図

EToS 監修・協力講座

「新・江戸東京研究」江戸文化編・建築都市編

開催日：以下のとおり（月 1 回、1 年間）
主催・会場：NHK 文化センター青山教室（有料講座）

江戸を下敷きとする東京の都市は、世界の中でも非常に特徴があります。独自の歴史に裏打ちされた東京についてより深く認識するためのNHK文化センター青山教室主催の一年間の講座に、江戸東京研究センターに所属する都市建築学、文学、美術史、地理学など様々な分野の所員が講師として登壇しました。

2025/04/11（金）
　江戸文化入門（田中優子）
2025/05/23（金）
　将軍の鷹狩と江戸・周辺農村（根崎光男）
2025/06/13（金）
　近代人の江戸幻想ー落語「芝浜」を視点にして（中丸宣明）
2025/07/25（金）
　江戸戯作の世界　洒落本と黄表紙（小林ふみ子）
2025/08/08（金）
　江戸の手品文化（横山泰子）
2025/09/26（金）
　江戸の地図文化（米家志乃布）
2025/10/10（金）
　東京ー新たな水都をめざして（陣内秀信）
2025/11/14（金）
　江戸の長屋と東京のマンションからみるコミュニティの変遷（北山恒）
2025/12/26（金）
　江戸の名所絵を地図で分析する（福井恒明）
2026/01/09（金）
　ふたしかな時代の建築まちづくり（山道拓人）
2026/02/27（金）
　江戸東京の河岸空間「水辺から読む都市の成り立ち」（高道昌志）
2026/03/27（金）
　江戸東京の庭園と上水のしくみ：江戸から明治まで（内藤啓太）

EToS報告書

東京発掘プロジェクト　2024　東京水辺再生プロジェクト

監修：皆川典久
発行：法政大学　江戸東京研究センター
発行年月：2025年3月
　「東京水辺再生プロジェクト」概要　皆川典久
霊巌島とそれを取り巻く水辺について　細田卓志
　望月颯希
　李奕能
谷中・藍染川再生プロジェクト　奥田朝子
　唐婧雯
　細田卓志

シン町家百科

編者：山道拓人、香月歩、佐竹雄太、森中康彰
著者・インタビュー：アリソン理恵、猪股誠野、北山恒、西村直己（株式会社八清）、能作淳平、寶神尚史、山本円郁
出版社：盆地Edition
発行年月：2025年8月

はじめに　山道拓人
1　建　築
町家型の建築　森中康彰
京都のタイポロジーハウス　北山恒
シン町家01　みずのき美術館
シン町家02　京の温所竹屋町
シン町家03　houseA/shopB（BOLTS HARDWARE STORE）
シン町家04　room&house
町並01　看板建築
シン町家05　烏丸御池のタイポロジーハウス
2　町　並
「江戸」の展開としての町家　香月歩
公共型空き家再生の10年とこれから
　――郡上八幡チームまちやの取り組み　猪股誠野
町並02　埼玉県川越市
町並03　岐阜県中津川市馬籠宿
町並04　石川県金沢市
町並05　東京都品川区不動前
シン町家06　不動前ハウス
町並06　岐阜県郡上市八幡町
事業01　チームまちや
3　不　動　産
シン町家型の不動産的価値　佐竹雄太
京町家と不動産のルール　西村直己（八清 代表取締役社長）
町家は暮らしの選択肢を増やし、街を豊かにする　寶神尚史
事業02　エンジョイワークス
事業03　NOT A HOTEL
シン町家07　目白通り裏の住宅
シン町家08　佐竹邸
シン町家09　街の家
シン町家10　日本橋の家
町並07　京都府京都市

事業04　株式会社八清
シン町家11　KITAYON
シン町家12　上池台の住宅〈いけのうえのスタンド〉
シン町家13　SPACESPACE HOUSE
4　ルール
ルールから見るシン町家　山道拓人
亡霊と共に暮らす――奈良井宿についての批判　山本円郁
町の営繕とタイポロジーのメンテナンス　アリソン理恵
シン町家富士見台トンネル　能作淳平
町並08　長野県塩尻市奈良井宿
シン町家14　奈良井宿古民家群活用プロジェクト「上原屋」
町並09　東京都世田谷区下北沢
シン町家15　下北線路街 BONUS TRACK
町並10　東京都豊島区長崎
シン町家16　MIA MIA
シン町家17　富士見台トンネル
おわりに　山道拓人

東京を散歩哲学する

編者：岡村民夫
編集・発行：法政大学　江戸東京研究センター
発行年月：2026年1月30日
はじめに　岡村民夫
シンポジウム「東京を散歩哲学する」プログラム
〈講演〉
チャランポランへの誘い　島田雅彦
境界を問う散歩――国木田独歩「武蔵野」　伊東弘樹
散歩哲学の先駆者 ――ニーチェ、柳田国男、萩原朔太郎　岡村民夫
〈パネリスト・コメント〉
コメント①　散歩、哲学、詩という三位一体について　山﨑修平
コメント②　散歩の比較から炙り出される東京の都市としての特質
陣内秀信
コメント③　自分の散歩哲学　横山泰子
執筆者一覧

著書・論文・学会発表・作品・その他

著書

書名：재난의 대중문화：자연재해・역병・괴이
著者名：요코야마 야스코（横山泰子）
標題：제7장| 오카모토 기도와 역병
発行：보고사
発行年月：2024年2月

書名：仙台藩の組織と政策（共著）
著者名：松本剣志郎（荒武賢一朗・野本禎司編）
標題：江戸留守居の成立と職掌
発行：岩田書院
発行年月：2025年2月

書名：中國的水鄉都市：蘇州及周邊的水文化
著者名：陣内秀信編/陣内秀信・高村雅彦・木津雅代・阮義三著、王錦堂 原譯・蘇睿弼校訂
発行：臺隆書店
発行年月：2025年6月

書名：岡本綺堂日記昭和6年1月～昭和7年12月
著者名：横山泰子
標題：昭和六，七年の岡本綺堂について
発行：早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点
発行年月：2025年7月

書名：地中海都市の空間人類学
著者名：陣内秀信
発行：古小烏舎
発行年月：2025年7月

書名：鯰魚之怒：日本大眾文化中的天災・疫病・怪異（共著）
著者名：横山泰子
標題：冈本绮堂和疫病
発行：北京大学出版社
発行年月：2025年8月

書名：日本漢文を読む［近世編］
著者名：沖森卓也,合山林太郎編
標題：小林ふみ子分担：第13章 狂文・第14章 狂詩
発行：朝倉書店
発行年月：2025年9月

書名：シン町家百科
編者：山道拓人、香月歩、佐竹雄太、森中康彰
執筆・インタビュー：アリソン理恵、猪股誠野、北山恒、西村直己（株式会社八清）、能作淳平、寳神尚史、山本円郁
発行：盆地Edition
発行年月：2025年9月

書名：Tool for Living with Uncertainty（電子書籍）
著者名：ツバメアーキテクツ（山道拓人・千葉元生・西川日満里）
発行：TOTO出版
発行年月：2025年9月

書名：La Costiera Amalfitana:struttura urbana e territoriale
著者名：Hidenobu Jinnai, Mateo Dario Paolucci, Giuseppe Gargano, Yuta Inamasu
発行：Centro di Cultura e Storia Amalfitana
発行年月：2025年10月

書名：世界遺産級都市・東京地形探訪
著者名：皆川典久
発行：山川出版社
発行年月：2025年10月

書名：不確かな時代の編集稽古入門
著者名：田中優子
発行：朝日新聞出版
発行年月：2025年11月

書名：アートの地理学
著者名：米家志乃布（編著）・福田珠己・関戸明子・荒又美陽
標題：3章　木版画アートにみる都市風景
発行：古今書院
発行年月：2025年11月

書名：アートの地理学
著者名：米家志乃布（編著）・福田珠己・関戸明子・荒又美陽
標題：5章　銅像がつくるモダン東京名所
発行：古今書院
発行年月：2025年11月

書名：アートの地理学
著者名：米家志乃布（編著）・福田珠己・関戸明子・荒又美陽
標題：コラム3　「江戸木版画」の現在
発行：古今書院
発行年月：2025年11月

書名：江戸から見直す民主主義
著者名：田中優子、関良基、橋本真吾
発行：現代書館
発行年月：2025年12月

書名：東日本スリバチ地形まち歩き／1巻・2巻
編著者名：皆川典久
発行：学芸出版社
発行年月：2026年1月

査読付論文

論文標題：将軍の鷹狩と御殿・御茶屋ー南関東を中心にー
著者名：根崎光男
書名：徳川御殿の考古学（吉川弘文館）
発行年月：2025年2月

論文標題：天水井戸を用いた伝統的水利システムによる庭園空間に関する調査 ー大島町波浮港旧甚の丸邸庭園を対象にー
著者名：内藤啓太、張平星、高道昌志

雑誌名：住総研研究論文集・実践研究報告集 第51巻 pp. 117-128
発行年月：2025年3月

論文標題：立原道造研究ノート
著者名：岡村民夫
雑誌名：四季派学会論集 29号
発行年月：2025年3月31日

論文標題：地図リテラシーにおけるJ.ベルタンの図の体系の発見的仮説推論方法の位置づけ
著者名：森田喬
雑誌名：地図
発行年月：2025年6月

論文標題：隠岐の島町西郷港周辺地区における水辺空間に着目した河川景観の形成過程と愛着の関係に関する考察
著者名：渡邊真由、福島秀哉、福井恒明
雑誌名：土木学会論文集
発行年月：2025年7月

論文標題：Characteristics of J. Bertin's graphic system from the perspective of heuristic and abductive reasoning methods
著者名：Takashi Morita
雑誌名：Proceedings of The 32nd International Cartographic Conference, Vancouver, Canada
発行年月：2025年8月

論文標題：河岸地の歴史的変遷過程に見る近代東京の水際空間　制度・空間・運用の実態分析を通じて
著者名：高道昌志
雑誌名：日本建築学会計画系論文集 第90巻 第835号
発行年月：2025年9月

論文

論文標題：蔦屋重三郎がつくり出した江戸の出版文化
著者名：田中優子
雑誌名：サライ
発行年月：2025年2月

論文標題：岡本綺堂作品と「神経衰弱」
著者名：横山泰子
雑誌名：国際日本学
発行年月：2025年2月28日

論文標題：都内最長の用水路をもつ日野市の歴史とその活用
著者名：石渡雄士
雑誌名：狭山池シンポジウム2023　狭山池と水ー史跡から考えるくらしと水環境ー　記録集
発行年月：2025年3月

論文標題：イタリアの地域戦略に学ぶ：田園美とワイン活用
著者名：陣内秀信
雑誌名：『日本農業新聞』
発行年月：2025年3月9日

論文標題：下北沢の「沢」を求めて　柳田国男、萩原朔太郎、吉増剛造
著者名：岡村民夫
雑誌名：異文化 26号
発行年月：2025年4月1日

論文標題：江戸時代の芸術文化
著者名：田中優子
雑誌名：ナント歴史博物館・葛飾北斎展図録
発行年月：2025年7月

論文標題：もう戦時体制です
著者名：田中優子
雑誌名：『地平』
発行年月：2025年8月

論文標題：野田又夫とフランス哲学
著者名：安孫子信
雑誌名：フランス哲学・思想研究30号
発行年月：2025年10月1日

論文標題：江戸周辺地域における広域支配の様相とその多様性ー「江戸十里四方」・「江戸五里四方」領域を中心にー
著者名：根崎光男
雑誌名：人間環境論集第26巻第1号（法政大学人間環境学会）
発行年月：2025年10月

論文標題：栃木の門人と大田南畝ー狂歌の添削からー
著者名：小林ふみ子
雑誌名：喜多川歌麿と栃木の狂歌（栃木市立美術館展覧会図録）
発行年月：2025年10月

論文標題：まだ繰り返される差別と暴力
著者名：田中優子
雑誌名：『経済』
発行年月：2025年11月

論文標題：都市と交通の計画思想にみる歩行の位置づけの変遷 ー歩行行動の多義性に着目してー
著者名：中村仁哉、佐瀬優子、福井恒明
雑誌名：第72回土木計画学研究・講演集
発行年月：2025年11月

論文標題：肱川中下流域における河川整備と沿川土地利用・河川利用の変化の関係
著者名：辻玉実、福島秀哉、福井恒明
雑誌名：第72回土木計画学研究・講演集
発行年月：2025年11月

論文標題：水利用施設の存在が住民自治組織活動に与える影響ー都上八幡北部を対象としてー
著者名：田口幸樹、福井恒明
雑誌名：第72回土木計画学研究・講演集
発行年月：2025年11月

論文標題：四万十町小野集落における河川区域外堤防の建設経緯と維持管理
著者名：渡邊優斗、迎侑大、一柳怜美、福井恒明
雑誌名：第72回土木計画学研究・講演集
発行年月：2025年11月

論文標題：大江町左沢地域住民の最上川に関する風景体験の形成
著者名：直川裕希、福井恒明
雑誌名：第72回土木計画学研究・講演集
発行年月：2025年11月

論文標題：まちに対するこどもの理解醸成に関する基礎的研究
著者名：横江玲奈、佐瀬優子、福井恒明、福島秀哉
雑誌名：第72回土木計画学研究・講演集
発行年月：2025年11月

論文標題：港湾と背後地域の連携に着目した「みなとまち」の類型化
著者名：江口友彌、福井恒明
雑誌名：第72回土木計画学研究・講演集
発行年月：2025年11月

論文標題：写真発信手法の時代変化に応じた風景写真描写の変遷 ー明治から現代の浅草を対象にー
著者名：片桐泰知、荻原知子、福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集, NO.21
発行年月：2025年12月

論文標題：今治市中心市街地の都市形成過程と社会・空間特性の関係に関する研究
著者名：車谷綾花、福島秀哉、福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集, NO.21
発行年月：2025年12月

論文標題：佐原の大祭運営組織が現代的地域自治に果たす役割
著者名：土田涼華、福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集, NO.21
発行年月：2025年12月

論文標題：1960年代から2010年代の東京都心部における公開空地の計画方針と空間特性
著者名：安孫子翔、荻原知子、福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集, NO.21
発行年月：2025年12月

論文標題：歌舞伎町シネシティ広場のデザイン変遷とその社会的背景
著者名：津田蓮太、荻原知子、福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集, NO.21
発行年月：2025年12月

論文標題：第2次世界大戦後の皇居と江戸城の史跡指定 ー文化財保護委員会委員長河井弥八を中心にー
著者名：内藤一成
書籍名：『史跡からみる江戸東京』
発行年月：2026年3月

学会発表（招待講演・国際学会）

発表標題：Historicizing the Yoshiwara Brothel Quarter: Investigating the Past, Documenting the Present by People around Ōta Nanpo and Santō Kyōden
発表者名：Fumiko Kobayashi
学会等名：ワークショップUnexplored Crossways of Antiquarianism in Japan's Long Nineteenth Century
発表場所：上智大学
発表年月：2025年1月

発表標題：Eco-history,rigenerazione e modi dell'insediamento
発表者名：Hidenobu Jinnai
学会名等：Celebrazioni del CINQUANTENARIO DELLA FONDAZIONE 1975–2025 del CENTRO DI CULTURA E STORIA AMALFITANA
発表場所：アマルフィ文化歴史センター（イタリア）
発表年月：2025年5月

発表標題：天水井戸を用いた伝統的水利システムによる庭園空間に関する調査 ー大島町波浮港旧甚の丸邸庭園を対象にー
発表者名：内藤啓太
学会等名：住総研2025年度「研究・実践 選奨」「同 奨励賞」記念講演会
発表場所：ビジョンセンター東京駅前
発表年月：2025年6月

発表標題：女性差別撤廃条約（CEDAW）と日本女性の現状
発表者名：田中優子
学会等名：韓国女性政治センター国際会議
発表場所：韓国・ソウル
発表年月：2025年8月

発表標題：Characteristics of J. Bertin's graphic system from the perspective of heuristic and abductive reasoning methods
発表者名：Takashi Morita
学会等名：The 32nd International Cartographic Conference
発表場所：Vancouver,Canada
発表年月：2025年8月19日

発表標題：『絵兄弟』を絵で読む
発表者名：小林ふみ子
学会等名：日本近世文学会国際研究集会
発表場所：ケンブリッジ大学
発表年月：2025年9月

発表標題：イタリアのテリトーリオ戦略：甦る都市と農村の交流
発表者名：陣内秀信
学会名等：テリトーリオ研究会設立記念シンポジウム
発表場所：東京科学大学
発表年月：2025年10月

発表標題：Verso rigenerazione ambientale delle città e del territorio: Studio comparativo tra Italia e Giappone
発表者名：Hidenobu Jinnai
学会名等：La rigenerazione dei pasaggi storici e dei valori

identitari in Italia e in Giappone
発表場所：アマルフィ文化歴史センター（イタリア）
発表年月：2025年11月

発表標題：山縣有朋と椿山荘
発表者名：鈴木誠、内藤啓太
学会等名：令和7年度農水省三番町共用会議所一般公開トークイベント
発表場所：農水省三番町共用会議所
発表年月：2025年11月

発表標題：《越境建築家》たちとの対話ー「越境」が建築家にもたらすものー
発表者名：山道拓人（ツバメアーキテクツ／法政大学准教授）、井本佐保里（日本女子大学准教授）、後藤克史（Squareworks LLP）、早野洋介（MAD Architects）
学会等名：JIA建築家大会2025千葉
発表場所：千葉県文化会館
発表年月：2025年11月7日

発表標題：地域づくりと建築家の新たな活動
発表者名：栗生はるか、伊藤孝仁、澤田圭司、田島則行、若林拓哉
学会等名：JIA日本建築家協会
発表場所：千葉県文化会館
発表年月：2025年11月8日

学会発表

学会等名：法政大学江戸東京研究センターシンポジウム「東京を散歩哲学する」
コメンテーター：山﨑修平
発表場所：法政大学市ヶ谷キャンパス大内山校舎Y503
発表年月：2025年3月1日

発表標題："応急仮設住宅における居住のミスマッチング
ー能登半島地震で建設された規格型仮設住宅の分析ー"
発表者名：金丸晃輔（法政大学）・平澤佑太郎・岩佐明彦
学会等名：人間・環境学会第32回大会
発表場所：広島大学東千田キャンパス
発表年月：2025年5月31日

発表標題："応急仮設住宅におけるカスタマイズ
ー能登半島地震で建設された規格型仮設住宅の分析ー"
発表者名：平澤佑太郎（法政大学）・金丸晃輔・岩佐明彦
学会等名：人間・環境学会第32回大会
発表場所：広島大学東千田キャンパス
発表年月：2025年5月31日

発表標題：蕙斎絵本の着想源ー略画と懐古風ー
発表者名：小林ふみ子
学会等名：国際浮世絵学会
発表場所：国学院大学
発表年月：2025年6月

発表標題：立原道造研究ノート　山と病院
発表者名：岡村民夫
学会等名：四季派学会
発表場所：さいたま市南区別所沼会館
発表年月：2024年6月29日

発表標題：地図における発見的仮説推論
発表者名：森田喬
学会等名：日本地図学会年次定期大会特別セッション「デジタル時代の地図リテラシー再考」
発表場所：神奈川県立生命の星地球博物館
発表年月：2025年8月31日

発表標題：水資源の受容型利活用デザインに関する研究　水資源の「受け方」と「流し方」に関する事例報告
発表者名：菅原遼・佐藤布武・高道昌志・内藤啓太・籔谷祐介・湯淺かさね
学会等名：日本建築学会2025年度大会（九州）学術講演会
発表場所：九州大学
発表年月：2025年9月

発表標題：水系で読む歴史都市のテリトーリオ
発表者名：高道昌志
学会等名：日本建築学会2025年度大会（九州）都市計画部門パネルディスカッション：産業と空間の関係を再考すー産業テリトーリオの概念からー
発表場所：九州大学
発表年月：2025年9月

発表標題：屋敷絵図に描かれた庭園空間に関する研究ー江戸の大名屋敷を事例としてー
発表者名：内藤啓太
学会等名：日本建築学会全国大会（九州）
発表場所：九州大学伊都キャンパス
発表年月：2025年9月

発表標題：近代における江戸大名庭園の変容 ー松方正義邸を例にー
発表者名：畠山望美
学会等名：日本建築学会全国大会（九州）
発表場所：九州大学伊都キャンパス
発表年月：2025年9 月

発表標題：銅像がつくるモダン東京名所
発表者名：米家志乃布
学会等名：日本地理学会
発表場所：弘前大学
発表年月：2025年9月20日

発表標題：大内山庭園の来歴と大江宏
発表者名：内藤啓太、藤本貴子
学会等名：第1回大江フェス
発表場所：法政大学市ヶ谷田町校舎
発表年月：2025年11月

発表標題：雨庭の基準化と蓄雨性能の簡易評価の検討（その2）
発表者名：神谷博
学会等名：（公社）雨水貯留浸透技術協会
発表場所：「水循環」2026. Vol137
発表年月：2026年1月号

著作について書かれた書評

評者名：三中信玄
媒体名：みすず読書アンケート2024
書評掲載年月：2025年2月
対象著書（著者）：温泉文学史序説　夏目漱石、川端康成、宮沢賢治、モーパッサン（岡村民夫）

評者名：本村凌二
媒体名：毎日新聞
書評掲載年月：2025年10月4日朝刊
対象著書（著者）：『地中海都市の空間人類学』（陣内秀信）

評者名：後藤隆基
媒体名：REPRE 54号
書評掲載年月：2025年11月
対象著書（著者）：温泉文学史序説　夏目漱石、川端康成、宮沢賢治、モーパッサン（岡村民夫）

作品

作品名：井戸川射子試論
著者名：山﨑修平
媒体名：詩と思想6月号
発表日：2025年6月1日

作品名：君は詩だ
著者名：山﨑修平
媒体名：現代詩手帖7月号
発表日：2025年6月28日

作品名：漁港は美しい夏は消失によって
著者名：山﨑修平
媒体名：讀賣新聞
発表日：2025年9月26日

作品名：多摩川スカイブリッジ
景観検討監修：福井恒明
主体：公益社団法人土木学会
賞・媒体名：土木学会デザイン賞2025優秀賞
発表日：2025年11月14日

その他

標題：文庫解説 天明狂歌研究の現在
著者名：小林ふみ子
雑誌名：宇田敏彦校注『万載狂歌集』角川ソフィア文庫版
発行年月：2024年12月

標題：都市のなかの人と人を"くっつける"場所や仕掛け
著者名：栗生はるか
雑誌名：CEMEDINE Style
発行年月：2024年12月26日

作品名：減少する銭湯を再生、交流の場に
著者名：一般社団法人せんとうとまち（栗生はるか他）
賞・媒体名：第15回地域再生大賞　優秀賞
発表日：2025年1月

標題：東京の海上交通の歴史と現在
著者名：陣内秀信
雑誌名：『景観文化』Vol.64
発行年月：2025年1月1日

標題：時代を読む
著者名：田中優子
書名：東京新聞
発行年月：2025年1月ー12月

標題：今日の視角
著者名：田中優子
雑誌名：信濃毎日新聞
発行年月：2025年1月ー12月

標題：大江戸残照トリップ
著者名：田中優子
雑誌名：東京新聞
発行年月：2025年1月ー12月

標題：地中海世界の都市と庭園
著者名：陣内秀信
雑誌名：『地中海学会月報』475
発行年月：2025年1月

標題：川田順造さんを悼む：行動力と好奇心　個を超え「人間」探求
著者名：陣内秀信（構成：女屋泰之）
雑誌名：朝日新聞
発行年月：2025年1月22日朝刊

標題：海辺の崖上都市トロペアでの建築ワークショップ
著者名：陣内秀信
雑誌名：『CRONACA』179
発行年月：2025年冬

論文標題：天水井戸を用いた伝統的水利システムによる庭園空間に関する調査 ー大島町波浮港旧甚の丸邸庭園を対象にー
著者名：内藤啓太、張平星、高道昌志
賞・媒体名：住総研第23回2025年度 研究実践選奨 奨励賞
発表日：2025年3月

標題：驚きの連続だった学生たちとの建築行脚
著者名：陣内秀信
雑誌名：『CRONACA』180
発行年月：2025年春

発表標題：地域の魅力や創生のヒントは、空間デザインの歴史にあり
発表者名：石渡雄士
発行：株式会社フロムページ
媒体名：夢ナビ講義VIDEO（https://douga.yumenavi.info/Lecture/

PublishDetail/2025004864?is-show-question）
発表年月：2025年5月

標題：ベネチア　都市の楽しみ
著者名：陣内秀信
雑誌名：日本経済新聞
発行年月：2025年5月4日朝刊

標題：齋藤忠光さんのご逝去を悼んで
著者名：森田喬
雑誌名：日本地図学会機関紙『地図』vol.63 No.2
発行年月：2025年6月

発表標題：パーマカルチャー講座
発表者名：神谷博
学会等名：パーマカルチャーセンタージャパン
発表場所：パーマカルチャーセンタージャパン藤野本部
発表年月：2025年6月8日

標題：雨降る火山の国の温泉文学　夏目漱石、田山花袋、宮沢賢治、獅子文六
発表者名：岡村民夫
講座名：令和7年度健康と温泉フォーラム総会記念講演
発表場所：北区北とぴあ
発表年月：2025年6月6日

標題：街は田園とともに
著者名：陣内秀信
雑誌名：日本経済新聞
発行年月：2025年6月8日朝刊

論考名：ポストコロナの新築の商店街
著者名：山道拓人
発行者：一般社団法人日本住宅協会
雑誌名：機関誌「住宅」
発表日：2025年7月号

標題：モロッコの結んだ縁
著者名：陣内秀信
雑誌名：日本経済新聞
発行年月：2025年7月13日朝刊

標題：温泉文学史序説　夏目漱石、川端康成、宮沢賢治、獅子文六
発表者名：岡村民夫
講座名：世織塾かぷかぷ
発表場所：新百合トウェンティワンホール
発表年月：2025年7月13日

書名：季刊大林 No.64「地図」
著者名：森田喬
標題：地図とは何か？（分担執筆）
発行：株式会社大林組
発行年月：2025年8月

発表標題：夏の文庫特集推薦本寄稿
発表者名：山崎修平
発表場所：週刊読書人
発表年月：2025年8月1日

標題：トルコを一周してみれば
著者名：陣内秀信
雑誌名：日本経済新聞
発行年月：2025年8月17日朝刊

標題：日本地図学会年次定期大会特別ギャラリートーク鳥瞰図の世界：初三郎絵図を読み解く
著者名：森田喬
発表場所：神奈川県立生命の星地球博物館
発行年月：2025年8月30日

標題：パルマ：テリトーリオから読む食の博物館
著者名：陣内秀信
雑誌名：『CRONACA』181
発行年月：2025年夏

標題：イタリア各地の農業形態とその現代的な再評価
著者名：陣内秀信
雑誌名：『CRONACA』182
発行年月：2025年秋

標題：サルデーニャと日本を結ぶ糸
著者名：陣内秀信
雑誌名：日本経済新聞
発行年月：2025年9月21日朝刊

標題：秋田・山形が面白い～男鹿半島・角館・酒田・鳥海山のテリトーリオを巡る
ツアー同行講師・現地コーディネーター：石渡雄士
主催：株式会社JTB
開催年月：2025年9月23～26日

標題：温泉文学と観光史
発表者名：岡村民夫
講座名：観光文学研究会
発表場所：立教大学新座キャンパス
発表年月：2025年9月30日

標題：土木デザインの展開
著者名：福井恒明
雑誌名：建設コンサルタンツ協会会誌［Civil Engineering Consultant］
発行年月：2025年10月

標題：都市史学会大会基調講演：吉田伸之「木の近世ー「伊那山」の都市性を考えるー」のコメント
著者名：陣内秀信
雑誌名：『都市史研究』12
発行：山川出版社
発行年月：2025年10月

発表標題：秋田県にかほ市における大地の歴史と空間構造
発表者名：石渡雄士
学会等名：秋田県歴史研究者・研究団体協議会
発表場所：秋田拠点センターアルヴェ4F洋室C
発表年月：2025年10月4日

標題：「東京型銭湯」現地体験イベント
ナビゲーター：栗生はるか
企画者：東京都都市整備局
開催年月：2025年10月10日

発表標題：雨水活用と雨庭
発表者名：神谷博
学会等名：せたがやグリーンインフラ学校
発表場所：烏山区民センター
発表年月：2025年10月11日

発表標題：グリーンインフラと雨庭の普及に向けて
発表者名：神谷博
学会等名：㈱カインズ勉強会
発表場所：カインズ青梅インター店
発表年月：2025年10月22日

標題：ダマスクスで見た地上の楽園
著者名：陣内秀信
雑誌名：日本経済新聞
発行年月：2025年10月26日朝刊

発表標題：都市と建築と雨
発表者名：神谷博
学会等名：水辺のまちサーキュラーLAB
発表場所：SHIBAURA HOUSE
発表年月：2025年10月31日

発表標題：日本のグリーンインフラと雨庭の普及
発表者名：神谷博
学会等名：エコ研水都交流セミナー
発表場所：法政大学ボアソナードタワーB会議室
発表年月：2025年11月23日

発表標題：雨庭はなぜ必要か一実践の流れと新潟での展開
発表者名：神谷博
学会等名：新潟県都市緑化センター第2回グリーンインフラセミナー
発表場所：新潟県スポーツセンターレストハウス
発表年月：2025年11月26日

標題：今年度の収穫
著者名：山崎修平
雑誌名：現代詩手帖
発行年月：2025年11月27日

標題：家に食卓はいくつある？
著者名：陣内秀信
雑誌名：日本経済新聞
発行年月：2025年11月30日朝刊

標題：まちの生態系をつなぎなおす
著者名：栗生はるか
雑誌名：月刊「ウェンディ」
発行年月：2025年12月15日

発表標題：景観デザインから読み解く大地と集落の歴史ーにかほ市を事例としてー
発表者名：石渡雄士
学会等名：にかほ市象潟郷土資料館
発表場所：金浦公民館2階軽運動室
発表年月：2026年1月22日13：40～15：10

書評

評者名：山崎修平
雑誌名：週刊読書人
発表年月：2025年1月17日
対象書籍：『カッコよくなきゃ、ポエムじゃない！』（思潮社）

評者名：山崎修平
雑誌名：週刊読書人
発表年月：2025年5月2日
対象書籍：『評伝ジョウゼフ・コンラッド』（松柏社）

評者名：山崎修平
雑誌名：朝日新聞
発表年月：2025年5月3日
対象書籍：文庫この新刊！（文庫書評）

評者名：山崎修平
雑誌名：朝日新聞
発表年月：2025年6月28日
対象書籍：文庫この新刊！（文庫書評）

評者名：山崎修平
雑誌名：朝日新聞
発表年月：2025年8月30日
対象書籍：文庫この新刊！（文庫書評）

評者名：陣内秀信
標題：イタリアとの比較の視点から
雑誌名：『都市史研究』12
発表年月：2025年10月
対象書籍：赤松加寿江・中川理編著『テロワールーワインと茶をめぐる都市・空間・流通ー』

評者名：山崎修平
雑誌名：朝日新聞
発表年月：2025年10月25日
対象書籍：文庫この新刊！（文庫書評）

*2026 年 3 月現在

江戸東京研究センター長

米家 志乃布（コメイエ シノブ）	教授	文学部 地理学科

研究プロジェクト・リーダー

地理情報システムと名所の景観プロジェクト

福井 恒明（フクイ ツネアキ）	教授	デザイン工学部都市環境デザイン工学科
米家 志乃布（コメイエ シノブ）	教授	文学部地理学科

都市表象史プロジェクト

高村 雅彦（タカムラ マサヒコ）	教授	デザイン工学部建築学科
小林 ふみ子（コバヤシ フミコ）	教授	文学部日本文学科

表象文化と近未来デザインプロジェクト

岡村 民夫（オカムラ タミオ）	教授	国際文化学部国際文化学科
山道 拓人（サンドウ タクト）	准教授	デザイン工学部建築学科

地図プロジェクト

福井 恒明（フクイ ツネアキ）	教授	デザイン工学部都市環境デザイン工学科
山道 拓人（サンドウ タクト）	准教授	デザイン工学部建築学科

特任研究員　（五十音順）

陣内 秀信（ジンナイ ヒデノブ）	特任教授	法政大学名誉教授
田中 優子（タナカ ユウコ）	特任教授	法政大学名誉教授

兼担研究員　（五十音順）

赤松 佳珠子（アカマツ カズコ）	教授	デザイン工学部建築学科
岩佐 明彦（イワサ アキヒコ）	教授	デザイン工学部建築学科
大塚 紀弘（オオツカ ノリヒロ）	准教授	文学部史学科
小口 雅史（オグチ マサシ）	教授	文学部史学科
衣笠 正晃（キヌガサ マサアキ）	教授	国際文化学部国際文化学科
下吹越 武人（シモヒゴシ タケト）	教授	デザイン工学部建築学科
髙田　圭（タカタ ケイ）	准教授	国際日本学研究所
高見 公雄（タカミ キミオ）	教授	デザイン工学部都市環境デザイン工学科
内藤 一成（ナイトウ カズナリ）	教授	文学部史学科
中丸 宣明（ナカマル ノブアキ）	教授	文学部日本文学科
畠山 望美（ハタケヤマ ノゾミ）	教務助手	デザイン工学部建築学科
増淵 敏之（マスブチ トシユキ）	教授	文学部地理学科
松本 剣志郎（マツモト ケンシロウ）	准教授	文学部史学科
横山 泰子（ヨコヤマ ヤスコ）	教授	理工学部創生科学科

客員研究員　（五十音順）

安孫子 信（アビコ シン）	法政大学名誉教授、国際日本学研究所客員所員
石神　隆（イシガミ タカシ）	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
石渡 雄士（イシワタ ユウシ）	秋田公立美術大学美術学部美術学科景観デザイン専攻 准教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
稲益 祐太（イナマス ユウタ）	東海大学建築都市学部建築学科准教授、法政大学デザイン工学部兼任講師、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
犬塚 悠（イヌツカ ユウ）	名古屋工業大学大学院工学研究科准教授
Olimpia Niglio（オリンピア ニーリオ）	イタリア パヴィア大学工学部土木・建築学科教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
CAROLI Rosa（カーロリ ローザ）	ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学言語学・比較文化研究学科教授
香月 歩（カツキ アユミ）	東京工芸大学 工学部工学科建築コース准教授
金谷 匡高（カナヤ マサタカ）	昭和女子大学非常勤講師、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
神谷 博（カミヤ ヒロシ）	水みち研究会代表、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
川添 裕（カワゾエ ユウ）	横浜国立大学名誉教授
北山 恒（キタヤマ コウ）	有限会社awn CEO、法政大学デザイン工学部名誉フェロー、横浜国立大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
栗生 はるか（クリュウ ハルカ）	一般社団法人せんとうとまち代表理事、跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部観光デザイン学科助教
河野 哲也（コウノ テツヤ）	立教大学文学部教育学科教授
齋藤 智志（サイトウ サトシ）	法政大学文学部兼任講師
佐竹 雄太（サタケ ユウタ）	株式会社アラウンドアーキテクチャー代表取締役
白石 さや（シライシ サヤ）	東京大学名誉教授（東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員）
鈴村 裕輔（スズムラ ユウスケ）	名城大学外国語学部教授
高道 昌志（タカミチ マサシ）	東京都立大学都市環境学部都市政策科学科助教、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
内藤 啓太（ナイトウ ケイタ）	東京農業大学地域環境科学部造園科学科助教
根崎 光男（ネサキ ミツオ）	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
星野 勉（ホシノ ツトム）	法政大学名誉教授、国際日本学研究所客員所員
皆川 典久（ミナガワ ノリヒサ）	東京スリバチ学会会長、鹿島建設株式会社
宮澤 諒（ミヤザワ　リョウ）	株式会社大林組 建築本部建築設計部
森田 喬（モリタ タカシ）	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
森中 康彰（モリナカ ヤスアキ）	一級建築士事務所 小坂森中建築 代表
山﨑 修平（ヤマザキ シュウヘイ）	詩人・作家・文芸評論家、「イリュミナシオン」代表、法政大学文学部兼任講師
山本 真鳥（ヤマモト マトリ）	法政大学名誉教授
渡邉 眞理（ワタナベ マコト）	法政大学名誉教授